
BLAZBLUE IN THE SECRETGAME

亜差覇蚊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLAZBLUE IN THE SECRET GAME

【Nコード】

N4872T

【作者名】

亜差覇蚊

【あらすじ】

BLAZBLUEのキャラ達が織り成す、殺しあい……

生き残るのは誰か……

その真実を、あなたはしることになる

注意事項（前書き）

ストーリーとは関係ありませんが、ストーリー内のルールなどと原作の相違点をまとめました

ちょっと改修

注意事項

原作との相違点

PDAの機能の相違

- 1…原作では、生存者の数も見れましたが、今作ではなし。
- 2…拡張パックなるものではありません。
- 3…常に、戦闘禁止エリアに赤いマークがあります。

ルール上の相違点

- 1…保護対象が死んだ事で条件失敗した場合は続行（首輪にPDAを読み込み、失敗した場合は除く。）
- 2…解除条件に相手を特定出来る名詞があるが、今作の仕様であるとわかっていただきたい。
- 3…ギイとナゴについては、レイチェルの意志で投げた……等以外であれば、戦闘禁止エリアでも特攻可能（あくまでギイとナゴの意志）
- 4…原作では、六階が最高階だったはずで、三日目突入時には三階は侵入禁止エリアですが、今作では三階が最高階なので、その辺りの時間配分は適当にですね。（一日一階って感じです）

キャラの持ち物

- 1…今作では、階毎に武器が強くなる制度はありません。
- 2…最初から自分の武器は持っています。（なかったら、ライチやバング、Λが最強誇りますんで）

ほぼ終わりがけで、色々な指摘をいただきましたので、作らせていただきました。

最後に、参加者一覧

- 1.. ラグナⅡザⅡブラッドエッジ
- 2.. レイチエルⅡアルカード
- 3.. シシガミⅡバング
- 4.. カルルⅡクローバー
- 5.. TRー0009・アイアンⅡテイガー
- 6.. ライチⅡフェイⅡリン
- 7.. ハザマⅡユウキⅡテルミ
- 8.. ジンⅡキサラギ
- 9.. ノエルⅡヴァーミリオン
- 10.. マコトⅡナナヤ
- 11.. ツバキⅡヤヨイ
- 12.. Λー11
- 13.. タオカカ

となっております。

順番はばらばら、持つPDAもばらばらですので、頭の数字が解除条件ではありません

それではどうぞ

注意事項（後書き）

それでは、本編どうぞ

プロローグ（前書き）

上杉様、ヴァイス様、申し訳ないm（m

内容を一部書き換えましたf^|^; ;

毎日午前零時更新予定です

プロローグ

ラグナが眼を醒ましたのは、見知らぬ部屋だった。

「いててて……。ああ？ どこだここ？」

ラグナは、まっさきに昨日の記憶を蘇らせた。
だが、もちろん思い当たる節はない。

「なんだなんだあ？ 起きたら知らねえ壁と対面ってか？ 悪趣味
にもほどがあんだろ」

そんな風に、喚き散らしている時だった。
部屋の中に、赤黒い風が舞った。

「あら、ラグナ。ごきげんよう」

「うわっと！ うさぎ！ テメエの仕業か？」

風から現れたのは、ラグナいわくうさぎこと、レイチエル＝アル
カードだった。

「あら？ あなたが、私を監禁したのではなくって？」

「バーカ、テメエみてえなうさぎ、誰が監禁するか！ 気色悪い」

「行きなさい！」

「オブバァツ！？」

ギイの蹴りが、ラグナの顎を打った。

「何しやがる！ うさぎ！ ぜってえ殺してやる！」

「あら、これはルール上ギリギリみたいね。そんなことは、どうでもいいわ。それより、早くここから出ることが優先じゃなくって？」

レイチェルの言っていることは、しごくもつともで、ラグナも頭を悩ませた。

「そういえば……おい、うさぎ。お前も起きたら、こんなだったのか？」

ラグナの思い至った所、レイチェルも同じ境遇なのか？ ということ。

「ええ。ただ、私の部屋はもっと豪華だったわ」

「豪華ねえ」

ラグナは、思わず部屋を見回した。

バネが飛び出ているベッド、古ぼけたちゃぶ台、きわめつけは木製の扉。

「ハア」

「どうしたの？ ラグナ。間拔けな顔が、更に間拔けな顔よ」

「うっせえ、黙ってろ。そうだ、後変わったこととかないか？ な

んか、モノがなくなってるゝとか」

「ないわね、ギィもナゴもいる。ただ、この建物内から外への転移は無理みたいね」

「建物内？　ってことは何か？　この部屋は、その建物の一部ってことか？」

「はい、よく出来ました。間抜けなラグナ」

「テメエ、後で覚えてろよ。っつか、もうそこまで調べたのかよ」

「いいえ、正直、外に転移しようとしたのと、ここに来ただけよ。何故？　って顔してるわね。理由は簡単、これよ」

そう言って、レイチェルが手に持っていた四角い板の様なモノを出す。

「なんだ？　それ」

ラグナには、見覚えが無いものだった。

「これは、私の部屋のテーブルに……、あなたのもあるじゃない」

レイチェルが指差したのは、ちゃぶ台の上。

レイチェルが持っているものと同じ形、色、大きさのモノが置いてあった。

「ああ、あったのか」

「ホント、相変わらず間抜けなんだから」

「だからうっせえって！」

ラグナはその板を手に、しばし考え込む。

「どうしたの？ ラグナ」

「いや、何なんだろうな？ って」

ラグナは適当に、その板に触る。

表面に触れた時、そこが明るく光った。

「おっ？ 電源が入ったみてえだな」

その画面には、ハートのQと書かれていた。

「なんだこれ？ ハートのQ？」

それを聞いたレイチェルが、口許をニやつかせた。

「あら、ラグナ。よかったわねえ、対象がここに居て」

「は？ 何言ってるんだ？」

「あなたのそれ、貸してごらんなさい」

レイチェルは、手をひらひらとさせる。

意味がわからない以上、今はレイチェルに従うのが、吉と踏み、手渡す。

「ほら、これ」

レイチェルは2、3度画面に触ると、今度は画面が見やすいように返してきた。

「なんだこりゃ？」

ラグナが見たのは、文字の羅列。

「読んでごらんないな、ラグナ」

今だに、不適な笑みを浮かべるレイチェル。

ラグナは、内心恐々といった感じで、それに眼を通す。

『ハートQ……解除方法…レイチェルに、65時間以上仕える。』

「はあああああ？　なんだよ、クソうさぎに65時間以上仕えろだああ？　ふざけんなよ！」

思わず、それを壁にたたき付けそうになる。

「あら、そんなことをしていいのかしら？　ラグナ」

「ああん？」

「そんなことをしたらあなた……死んでしまうわよ」

「なああにいい？　死んでしまうだとおおお？」

「ええ、それが破壊又は、破棄された瞬間、首に巻かれた首輪が作動し、さようなら……ね」

「おいおいおい、シャレになってねえぞ！　っておい！　俺の奴、壊そうとすんじゃないやねえよ！」

「え？　だってあなた、いないんでしょ？」

「いやいやいや、いる！　いるから！」

そう言っ、レイチェルの手から取り上げる。

「まったく……。はあ、なんでよりもよって、クソうさぎになんぞ仕えなくちゃならねえんだ？　クソがあ」

「そうだ、ラグナ。あなた、私のしもべになったのよねえ？」

またも不適な笑みを浮かべて、言い寄ってくる。

「なっ！　ちょっと、待て。俺はまだ、そんなこと言っ、てねえよ！」

「酷いわ、ラグナ。あなた、私みたいな弱い女の子を一人で行かせる気？　よよよ……」

いかにも業とらしく、座り込み、眼を隠して泣きじゃくるような姿勢をとる。

「誰が、か弱い女の子だ。ああ、気色悪ッグボエ」

ギイの猛タツクルが、ラグナの腹を打った。

「てめえ、うさぎ！　ゲホッゲホッ」

「あら、案外綺麗に入ったのね。ご愁傷様」

悠然と扉に向け、歩いていくレイチェル。

「おい、待て。どこに行くんだよ」

「わざわざ私の行方を、あなたに教える必要があつて？　むしろ、しもべなら主について行くのが勤めでしょう？」

「だあああ！　わかったよ！　行きゃいいんだろ行きゃ！」

「その前に！」

ガバッと起き上がろうとしたラグナの顔に、突き付けるように人差し指を向ける。

「では、忠誠の誓いでも言ってもらいましょうか？　ラグナ」

一瞬、部屋が異様な空気に包まれ、時がとまったような錯覚に襲われた。

「はあ？」

「だって、あなたは私のしもべになったんですもの。裏切られては困るのよ」

「く……そがあああ！！　畜生、ああーはいはい。言ってやるよ！

よく聞けよ、クソうさぎ！ 俺は、お前のしもべです！ どうだ？ 伝わったか？ クソが」

「あら？ ごめんなさい。聞こえなかったわ、もう一回お願い。」

「黙れ！ クソうさぎが！ おら、さっさと行くぞ」

ラグナはさっさと用意を済ませると、扉を思い切り蹴っ飛ばす。その反動で木製扉は、見事にバラバラに吹っ飛んだ。

「チッ、おい、うさぎ。てめえ以外の奴も探すぞ！ 他にもいるかも知れねえ」

「そんなことは、わかってるわ。さっさと行きなさい、犬」

「うさぎ……てめえ、帰ったらぜってえぶっ殺す」

「あなたに出来るかしら？ 負け犬のラグナ」

「だああああ！ うっせえええ！」

二人は叫びあいながら、1番大きな広場へと向かった。

プロローグ（後書き）

次話お楽しみに

ルール上の指摘があればどんどん言ってください f ^
| ^ ;

プロローグ2（前書き）

どうぞ

プロローグ 2

この建物が案外大きい事を、身を以って知らされた。

「おい、クソうさぎ。なんだよ、この広さ」

ラグナは、パネルに表示された地図と廊下を見ながら愚痴を零していた。

「ほら、さっさと歩きなさい」

レイチェルはナゴに座りながら、何故かスライド移動でついて来る。

「なあ、うさぎ……。前から思ってたんだが、その猫とかコウモリって何なんだ？」

「ナゴとギイのことかしら？　なら、単純に言えば、使い魔よ」

「使い魔ねえ……（こいつらも可哀相になあ……こんな、クソうさぎに仕えにゃならんとわ）」

ラグナはナゴとギイを見ながらため息をつく。

「ほら、ラグナ。もうすぐ着くわよ」

レイチェルの指差す先には、光る角が見えていた。

「やっとなついたか……」

ラグナがその広場に先に入る。
それに続くようにレイチェルも入る。

「むむ？ そなた達はラグナ殿と、レイチェル殿ではござらんか？」
聞き覚えのある声が、2人を招いた。

「あら、ほんとうね。2人とも、こっちに来て」

シシガミⅡバングと、ライチⅡフェイⅡリン、それにカルルⅡクローバーの3人が、部屋の角に座っていた。

「あんたらもいたのか、じゃあ、邪魔するわ」

そう言って、カルルの隣に座る。

レイチェルは、ナゴに深々と座り込んだ。

「まあ、言わずとも同じ境遇の样ね……」

ライチが、周りの4人を見回しながら呟く。

「そうでござろうな……。そなた達のPDAに載っているルールを見せて頂きたいのだが、構わぬか？」

バングの問いに、ラグナとレイチェルは目を合わせた。

「ルールの事も知らん様でござるな。拙者が説明するでござる。ルールは各PDAに1と2は書いてあるでござるが、それ以降、3と9のルール表記が無く、ランダムに2つずつ載せられているでござる」

る。故に最低4人の協力が必要となるでござる」

「わかった、これでいいか？」

ラグナは、自分のPDAをバングに渡した。

「かたじけないでござる。ふむ、今拙者達が持っているルールは、3、5、6、7、9の5つでござる。出来れば4と8のルールが知りたいとこでござるが……おおうライチ殿！ 4のルールが書いてあるでござるよ！」

「読み上げてもらえる？ バングさん」

「もちろんでござるよ！ 【ルール4】…最初に配られる通常の13のカードに加えて1台ジョーカーが存在している。ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、ランプの機能を他の13種のカード全とそっくりに偽装する機能を持っている。制限時間などは無く、何度でも別のカードに変える事が可能だが、一度使うと1時間絵柄を変える事ができない。さらにこのPDAでコネクして判定をすり抜ける事はできず、また、解除条件にPDAの収集や破壊があった場合にもこのPDAでは条件を満たすことができない……でござるよ」

バングが読み上げるのと、ほぼ同じスピードで書いていく。

さすがに医者だけあって、字を書くのは早いのか？

「レイチエル殿のPDAに8のルールは書いてあるでござるか？」

「あるわね……読むわよ。【ルール8】…指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が発動する。だそうよ」

これまたすらすらと書き上げていく。

「出来たわ、ルール一覧表よ」

そう言っつて、ライチは皆に見える様に紙を置いた。

【ルール1】

参加者には特別製の首輪が付けられている。

それぞれのPDAに書かれた条件を満たした状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外すことができる。

条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。

一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

【ルール2】

参加者には1〜9のルールが4つずつ教えられる、与えられる情報はルール1と2と、残りの3〜9から2つずつ。

5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

【ルール3】

PDAは全部で13台存在する。

13台にはそれぞれ、異なる解除条件が書かれており、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。

この時のPDAに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。他人のカードを奪っても良いが、そのカードに書かれた条件で首輪を外す事は不可能で、読み込ませると首輪が作動し着用者は死ぬ。あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。

【ルール4】

最初に配られる通常の13のカードに加えて1台ジョーカーが存在している。

ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、トランプの機能を他の13種のカード全てとそっくりに偽装する機能を持っている。制限時間などは無く、何度でも別のカードに変える事が可能だが、一度使うと1時間絵柄を変える事ができない。

さらにこのPDAでコネクトして判定をすり抜ける事はできず、また、解除条件にPDAの収集や破壊があつた場合にもこのPDAでは条件を満たすことができない

【ルール5】

侵入禁止エリアが存在する。

初期では屋外のみ。

侵入禁止エリアへ侵入すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止エリアが一階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館全域が侵入禁止エリアとなる。

【ルール6】

開始から3日間が過ぎた時点で生存していて、尚且つ首輪が外れている人間全てを勝利者とし、20億円の賞金を山分けする

【ルール7】

開始から6時間以内は全域を戦闘禁止とする。

違反した場合、首輪が作動する。

正当防衛は除外する。

【ルール8】

指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が発動する。

【ルール9】

解除条件は以下のとおりである。

スペードのA…兄さんを殺す。

ダイヤの2…レイチェルⅡアルカードを殺す。

クラブの3…自身のPDAで、4台の首輪を作動させる。

ハートの4…外されていない首輪を、2つ集める。

スペードの5…ノエルⅡヴァーミリオンと、ツバキⅡヤヨイ両者をゲーム終了5分前まで、護りきる。

クラブの6…スペードの9を、終了5分前まで護りきる。

ダイヤの7…計10台のPDAの破壊。

クラブの8…終了5分前に、生存者が4人以上いること。

スペードの9…70時間以上、行動を共にしたプレイヤーの殺害。

ダイヤの10…スペードのAとダイヤの2を狩る。

クラブのJ…全プレイヤーの殺害。

ハートのQ…レイチェルに65時間以上仕える。

スペードのK…終了5分前まで無傷でいること。

プロローグ2（後書き）

次話お楽しみに

プロローグ3 (前書き)

どうぞ

プロローグ 3

「理不尽ね」

ライチの開口1番は暗くする言葉だった。

「今はまだ、2時間49分……後3時間はルールで護られますね」

カルルの言った言葉は正しかった。

ゲーム開始から6時間は、攻撃出来ない。

すれば、死が待っている。

「だが、知らずに突っ込んで来やがるかもしれねえからな、油断は出来ねえ」

「そういえば、ラグナ殿はハートのQでござったな」

「ああ、隠す必要もねえしな。まったく、よりにもよってこんなクソうさぎの召し使いだだよ」

ラグナはPDAを置いた。

しっかりとハートのQが表示されていた。

「あはは。僕は、Kです。皆さんに危害を加える必要はありません」

カルルも同じ様にPDAを置いた。

「拙者が見せぬのは、フェアではござらん……拙者は6でござる」

バングが、PDAを置く。

「おっさん、6かよ」

「師匠、スピードの9は……」

スピードの9は、70時間以上、行動を共にしたプレイヤーの殺害が条件。

必ずどちらかが消える運命だ。

「拙者は、覚悟を決めているでござるよ」

そういつて、カルルとラグナにあえて明るい表情を見せた。

「そうかよ、じゃあ、女医さんは？」

ラグナが、聞いた瞬間だった。

ライチは目に見えて、驚いたような表情を見せた。

「私は、私……は……」

ライチは口ごもってしまった。

もうどうしようもなかった。

「言いたくなければ、別にいいでござるよ」

助け舟を出したのは、バングだった。

バングは腕を組ながら、ライチを見ていた。

「誰にでも、言いたくない事の1つや、2つはあるでござる、それを無理に聞くのはイカルガ男児としては、気が引けるでござる」

そのバングの声に、顔を上げたライチは意を決した様に口を開いた。

「私が……スペードの9です」

最悪の事態になってしまった。

二人が、ゲームの始めから出会ってしまった。

だが、俯くライチを尻目に、バングは笑いながら言った。

「おおーライチ殿が、スペードの9でござったかあーそれはよかったでござる」

バングの予想外過ぎる発言に、一同は顔を揃えてバングを見た。

「なんでござる？ 顔に何かついてるでござるか？」

「お前、女医さんがスペードの9って聞いて驚かねえのかよ？」

ラグナと意見は同じなのだろう、皆はじつとバングを見て答えを待った。

「そんなことでござるか？ 別に驚かんでござるよ！ 拙者は覚悟を決めたと言ったでござろう。それにライチ殿の条件を満たすためには、拙者がついておく方がいいでござるしな」

「あなた、ほんとうに馬鹿なのね」

レイチェルが久々に口を開いたかと思うと、いきなり罵声を浴びせた。

「馬鹿で結構でござる。拙者は、己の精神は曲げぬでござるよ」

そこまで言った時だった。

真横から、ライチがバングに飛びついた。

「うおっ？　ライチ殿？」

「ごめんなさい……ごめんなさい……。私、私は……」

ライチは、バングの胸に顔を埋めながら泣いていた。

「ライチ殿が、気にすることではござらん。愛する人を護るためならば、漢、シシガミⅡバング！　よろこんで身をさしだすでござるよ。」

バングは、大声を上げながら笑い出す。

その胸では、更に火がついたライチが泣きじゃくっていた。

「なあ、カルル。この2人……俺らがいること、忘れてるよな？」

「そうみたいです……僕たちだけで、進めましょうか」

「私は、クラブの3よ」

レイチェルは、隠すこともなく唐突に言った。

「クラブの3……僕らの首にPDAを差し込めば、完了ですね」

「そうね。でも、安心して……そんなではつまらないもの」

「信用……していいんですね？」

「もちろんよ」

「わかりました。これで、3、6、9、Q、Kが見つかった訳ですね」

「いや、このスペードのAはあいつしかいないだろ……」

ラグナが、言っているのは、青い服が特徴のやつ。

「この解除条件は、どう考えても、ジンだろ……」

『ジンⅡキサラギ』

アークエネミー…ユキアネサの所有者で、ラグナとは実弟。ラグナの事を兄さんと呼ぶ。

「確かに……兄さんで通じるのは、あの人しか」

カルルとラグナの頭の中には、狂喜じみたジンの顔が浮かんでいた。

『ヒヤハハハア！ 兄さーん！ 僕の為に死んでくれよおおー！』

考えただけでも恐ろしいわ……。

「カルル、お前はこれからどうするんだ？」

「僕は極力隠れてますかね。無傷が条件ですし」

「それもそうか……なら、こっからは三手に別れることになるな……」

「そういうことですね。でも、まだ3時間はありますし」

ラグナとカルルは考え込んだ。

他のプレイヤーが誰なのかと、話し合えるやつなのかと……

「とりあえず、Jは要注意か……」

ラグナが指したのはJの欄。

全員の殲滅を条件とする。

「こいつに6時間後以降ぶつかると、まずいな……」

「はい。本開始までは、ここにいきましょう。1番安全だと思います」

ラグナは「ああ」とだけ答えた。

プロローグ3（後書き）

次話お楽しみに

ゲームスタート(前書き)

どうぞ

指摘あったらください m (m

ゲームスタート

開始から5時間37分

「そろそろか……結局誰も来なかったな」

ラグナは、PDAを見ながら言った。

「ですね……もしかしたら近くに潜んでいるってこともありえますね……」

カルルは、いたって冷静に分析していく。
こういうときの天才はうらやましい。

「そろそろ2人を起こさねえとな」

ラグナは言うのと立ち上がり、壁に背を預けて眠る2人に近寄る。

「後少しで開始だ。起きろよ」

「うむ……見張りを頼んでかたじけないでござる」

「ごめんなさい……お任せしてしまって」

「かまわねえよ……。それより、ちゃっちゃと用意しろよ」

2人とも簡単に起きて、心の中で安堵する。

「さて、じゃあ俺らは先に行くわ。俺ら狙うやつがいる以上、あん

たらに迷惑かけるかしんねえしな」

ラグナが言った。

確かにスペードのAとダイヤの2はレイチェルとラグナを狙うのが、目的となる。

「カルルは、敵に見つかんじゃねえぞ。見つかったら、無傷じゃすまないだろうしな」

「はい……では、またどこかで会うことがあれば」

「この恩は、忘れぬでござるよ」

「おう、なら俺らがピンチん時にでも助けてくれや！」

ラグナはレイチェルの前を歩く。

ラグナは背中越しに、右手をあげる。

時間は開始まで、後5分と迫っていた。

テレテレレーン

テレテレレーン

突然2つのPDAが鳴り響いた。

ラグナとレイチェルはさっとPDAを出し、画面に触れる。

『さあ、これから楽しいゲームの始まりだ。存分に殺しあってくれ』

「なめてんのか？　ったく……」

ラグナはPDAをポケットに突っ込み、レイチェルの前を先導していく。

「なかなか様になっているじゃない、ラグナ」

「るせえ！　こうしなきゃ生きて帰れねえんだよ」

「まあいいわ。取り合えず、早い内に2階に上がっておきましょう」

レイチェルは今だにナゴに座ったままで、PDAの地図を見ながらしゃべっていた。

「当たり前だ。敵がいたら構わず潰すがな」

そんな2人のやり取りを、影で見つめる者がいた。
その影とは、ノエルⅡヴァーミリオンだった。

「ラグナⅡザⅡブラッドエッジ……。それと、レイチェルⅡアルカード……」

ノエルは、2人をずつつけてきていた。

「……ダイヤの2、レイチェルⅡアルカードの殺害」

ノエルは、考えていた。

今やみくもにレイチェルを狙うとする。

万が一レイチェルを殺せても、ラグナに返り討ちにされる危険がある。

「ここは、一か八か」

ノエルは影から出ると、2人を追い掛けた。

「待ってください！」

ラグナ達は声がするほうを振り返った。

「お前は、確か……」

「ノエルⅡヴァーミリオンね」

青いベレー帽に、青と白のワンピース風のユニフォーム。
統制機構の一員『ノエルⅡヴァーミリオン少尉』だった。

「追いついた……。あなた達は、仲間なんですか？」

ノエルは息を切らせながら、問い掛けた。

「まあそういうことになるな」

「よかったら、私も連れていってくれませんか？」

「なっ？」

ラグナとレイチエルは、互いに目を見合わせた。

「別にかまわないが、お前のプレイヤーナンバーは？」

ラグナは、共闘出来るかを知るために問い掛けた。

「プレイヤーナンバーですか？ ……Kです！」

ラグナ達は、その言葉に目を見開いた。

「本当にKなのか？」

ラグナはもう一度聞いた。

「はい、Kです。無傷でいることが条件なので、一緒に行けますよね？」

ノエルは、知らないはずだ。

カルルが提示したナンバーがKであったことに。

「わりいな、ノエル。お前を連れていく事は出来ねえよ……」

ラグナは背中から剣を手にした。

「ちよっ、なんで剣なんか抜くんですか？ ちよっと、ラグナさん」

困惑し続けるノエルを睨み付けて、ラグナは答えた。

「テメエがKなわけがねえ！ Kはカルルだ！」

言われた瞬間に、ノエルの表情が強張った。

「カルルは、しっかりとPDAを見せてくれた。だが、お前は見せ

てはいない。なら信用性があるのはどう考えたってカルルだろ」

言われた瞬間、ノエルの表情が困惑から怒りに変わった。

「そうですよ！ 私はKじゃない！ クラブの2、レイチェルⅡアルカードの殺害が目的です！」

そういうとノエルは、どこからともなくベルヴェルクを取り出し、身構えた。

「ちっ、こっちはクソうさぎに死なれちゃ困んだよ！」

ラグナは右手を前に突き出しながら、ノエルへと向かって行った。ノエルは、一度体を沈めると、一気に飛び上がり体を捻りながらラグナの後ろに回り込んだ。

「くそがっ！」

ラグナは振り向きざまに右手を振り、牽制しながら言い放った。

「お願いです、レイチェルⅡアルカードをこちらに引き渡してください！」

ノエルの放つ弾丸が、ラグナの剣を撃った。

「諦めがわりいぞ！ 馬鹿が！」

ラグナは軽く弾くと、一気に間合いをつめるべく、左手を突き出し黒い何かを纏ながら突っ込んだ。

「ヘルズファング！」

ノエルは、それを軽くジャンプして避ける。

「あなたに何がわかるんですか！ 私はレイチエルⅡアルカードを殺さないと死んじゃうんですよ！」

「黙れ！ こっちだってうさぎに死なれちゃこまんだよ！」

「何を！」

ノエルが零銃・フェンリルを取り出し構えた。

「私を忘れないでちょうだい！」

突如した声の方角から、なにやら見覚えのある丸い物が飛んで来ていた。

その丸い物は、ノエルの背中を撃つと、そこにそびえ立った。

「これは、レイチエルⅡアルカード！」

ノエルはさっと後ろを振り向くが、レイチエルは早くも次の攻撃を始動していた。

「バーデン・バーデン・リリー！」

レイチエルは黒いヒラヒラをなびかせながら宙に浮くと、自身の周り、今撃った柱に、雷を落とした。

「ぎゃあああああ！」

ノエルは避ける間もなく、くらう。

「これで終わりだ！ インフェルノ」

ラグナはノエルの前で高々とジャンプし、剣をノエル目掛けて突き出す。

「ディバイダー！」

ラグナとノエルの間の距離が、どんどん狭まって行く。
その間に、茶色く大きな尻尾を持った女が割って入った。

「はああ！」

その女は、ラグナの剣の身の部分に、自身の手に付けた独特な形のトンファをあてがった。

見事にラグナのインフェルノディバイダーは、ノエルの横に突き立った。

「せやあああ！ うりやあああ！」

尻尾の女は、左手を引き、力を籠めると、一気にラグナの腹目掛けて左手を突き出した。

その正拳突きはラグナの腹を打ち、ラグナが背にしていた廊下の奥まで吹き飛ばした。

「マコト？……」

「大丈夫？、のえるん」

尻尾の女……彼女はマコトⅡナナヤ
ノエルの士官学校時代の仲間

「とりあえず、のえるん逃げるよ」

「え？　　ちよつ、マコト！」

マコトはノエルの体を軽々担ぎあげると、自分のいる広場から、
2人のいない廊下を走って行った。

「ちっ、待て！　くそお」

ラグナは、地を撃った。

ゲームスタート（後書き）

次話お楽しみに

敵対（前書き）

どうぞ

敵対

「大丈夫だった？ のえるん、危ないところだったっしょ？」

マコト達は、少し逃げた所にある部屋で腰をおろしていた。

「なんでなのよ、マコト！ 私、レイチェルⅡアルカードを倒すのが、条件なのよ！」

「え？ ごめん……そうだって知らなくてさ……」

「あつ、そうだよね……こっちもごめん」

2人の間に、ぎこちない風が吹く。

「のえるんは、これからどうすんの？ またレイチェル探し？」

「うん、じゃないと私が死んじゃう」

「そか……私さ、ツバキとのえるん護るのが条件だからさ……その、これは友達としてだけど、死なないでよ……のえるんは、私の大事な友達だからさ」

ノエルはマコトの手を握って、笑い返した。

「ありがとう。マコト」

ノエルは扉を開けると、先に出て行った。

「死なないでね……のえるん……」

「ちっ、あのリスなんだよ……人の邪魔しやがって」

ラグナはいらいらしていた。

「仕方ないでしょ、彼女もプレイヤーなのよ」

レイチエルは今だに、ナゴから降りずについてくる。

「ハア……おっ？ あれタオじゃねえか？」

ラグナの指差す先には、黄色いワンピースの様なものを身に纏った人物。

フードのせいで顔もまともに見ることが出来ないが、そんな人物はラグナの頭の中で1人しかいなかった。

「みたいね……気づいたみたいよ」

「おお～いい人にやす！」

「よっタオ、お前は何番なんだあっ?!」

ラグナは、タオの攻撃を咄嗟に避けた。

「にゃあ～やっぱり、いい人は反応が早いにやす」

ふて腐れるタオ。

「デメエ、タオ何しやがる！」

「にゃあゝいい人ならあゝ首輪をくれるかなあって思ったにゃす」

「首輪？　これの事か？」

ラグナは、自身の首に巻き付く首輪を触った。

「それにゃす！」

「なんだ、ならついて来いよ。外してからやるよ」

ラグナの言った言葉に、また構え直す。

「外したらダメにゃすゝだからあゝいい人とちっちゃい人にはゝ死んでもらうにゃす！」

「ちよつと待てええ！　ちよつ、待て！　待てってタオ！」

「待ったら逃げられるにゃす」

タオは猫のような動きをするので、とにかく速い。

狭い通路で、闘うような相手ではない。

「クソが！」

ラグナは仕方なく、剣で捌きつつ後退して行く。

ラグナの後ろには、大きな部屋がある。

「にゃす！　にゃす！」

「ちっ、うざってえな！」

ラグナは、いい加減に頭にきていた。
だが一瞬、気が散ったのが大きなミスになった。

「今にやす！」

タオのアップパーに剣を弾かれる。

「なっ、やべえ！」

「覚悟するにやす！」

タオが、更に突っ込んできた。

ラグナは右手で、応戦しようと突き出すが、リーチが違いすぎる。

「万事休すか……」

そのラグナの視線の先には、レイチェルが走ってきていた。
そのままレイチェルはタオの後ろにつくと、風を巻き起こした。

「にゃっ？」

「ナゴ！」

「うるあああ！」

レイチェルが使い魔の猫・ナゴの名前を呼んだ時、傘になっていたナゴがアップパーをしてタオをうちあげた。

「これで大丈夫かしら？ 赤鬼さん？」

ラグナは、レイチェルの言っている言葉に違和感を感じた。
その違和感は、自身の後ろに何かが立つと言う違和感にかわっていった。

「アトミックコレダァー！」

ラグナの真上、宙に舞っていたタオの体を、タオの体ほどある手が、タオの体を掴み、すさまじい勢いで逆側の床にたたき付けた。

「デメエ、赤鬼」

ラグナの前には、自分の体の2倍はあるかもしれない巨体。
テイガーだった。

第七機関のココノエが、一般兵を改造したやつ。

「危なかったな。ラグナⅡザⅡブラッドエッジ、レイチェルⅡアルカード」

「何故あなたが私達を？」

「生きる為だ。私の条件は、生存者が4人以上いることだからな」

テイガーのPDAには、8の数字が書かれていた。

「3人相手はさすがにきついにやす〜逃げるにやす」

タオは話し込んでいるのを尻目に、一目散に逃げて行った。

「よかろう。それより、お前達の条件はなんだ？」

「俺はQだ。んで、うさぎが3」

ラグナに先に言われたのが頭にきたのか、鼻を鳴らす。

「ふむ、ラグナⅡザⅡブラッドエッジにはレイチエルⅡアルカードが必要なのだな。わかった。出来ればだが、私も同行したい」

「おお、仲間が多いにこしたことはねえからな」

「ありがたい。それでなんだが、お前達はこれからどうするんだ？」

「俺らは2階に上がるつもりだったぞ」

ラグナは当初の予定を、テイガーに伝えた。

「そうか、少し私の我が儘を聞いてはくれないか？」

敵対（後書き）

次話お楽しみに〜

遭遇（前書き）

どうぞ

ヴァイス様より、質問があったので

1、条件失敗したものはどうなるか？

続行です

2、解除条件の言葉が曖昧

「狩る」、「護る」は、「死んでいる」又は、「生きている」と思
ってください。

3、武器について

原作では階が上がる毎に、ナイフやら銃やらがセットされています
が、今回それはなく、全て自前の武器です

遭遇

テイガーが、申し訳なさそうに口を開く。

「なんだよ、言ってみなきゃわかんねえだろ」

「今の所で探したい人物がいる。ダイヤの7とクラブの6、スペードの9、スペードのKだ。彼等は特に敵対する必要もないのでな」

「なるほど、ちなみにだがダイヤの7はわからねえが、クラブの6はバングのおっさん、スペードの9は女医さん、スペードのKはカルルだ」

「シシガミⅡバングにライチ、それにカルルⅡクローバーか」

テイガーが、考え込み始めた時だった。

「うわっ、うわあああああ……」

悲鳴のような叫びを、3人は耳にした。

「おい、行くぞ」

それは、すぐ近くだった。

ラグナ達がいた広場から、廊下を二つ越えた先の角を曲がった所だった。

「こいつ、テルミか」

そこに倒れていたのは、体中ズタズタにされ、血が顔を覆っている為に確認は出来ないが、この帽子にこの服はハザマ以外にいなかった。

「くそっ、遅かったか……こいつのPDAか」

テイガーが手にしたのは近くに転がっていたPDA、それには7の数字が表示された。

「ダイヤの7かよ……」

「本当に遅かったようだな……」

テイガーが、落胆の声を上げた。

その時、すぐ近くにある部屋から物音がした。

「何の音だ？」

「わからないわ、すぐ近くだった様だけど」

レイチェルはいいながらも、近くの扉に向かって行った。

「おい、うさぎ！」

ラグナとテイガーも、レイチェルについていく。

レイチェルは、扉を躊躇い無しに開いた。

するとレイチェルは、含み笑いを浮かべた。

「どうした？ レイチェル！！アルカード」

テイガーの問い掛けに、レイチェルは手招きした。
テイガーとラグナは一度顔を見合わせたが、立ち尽くしている理由もないのでその部屋に入った。

「お前、カルル！」

物音の正体は、別れたはずのカルルだった。

「あっ……ラグナさん」

カルルは、声を出すのも精一杯という感じで奮えていた。

「何があった？ テルミのやつと一緒にだったのか？」

「待て！ ラグナⅡザⅡブラッドエッジ、落ち着くまでは待ってやれ」

ラグナが問い詰めだしたのを、割って入り止めたのはテイガーだった。

「ちっ、しゃあねえな」

ラグナは納得すると、カルルの横にどっかり座り込んだ。

「まったく、餓鬼なんだからよお」

そういつてカルルの頭に手を置き、ぐしゃぐしゃと撫で回す。

「やめ……やめてください、ラグナさん」

「おっ？ 元気になったか？」

カルルは、嫌々と言った感じの表情を向けた。

「ごめんなさい、取り乱してしまつて……」

カルルは隣に置いてあつた帽子を被り直し、深呼吸した。

「お待たせしました……ハザマさんの事ですよね」

カルルは、ラグナ達を見回してからしゃべりだした。

「ほんの1時間程前に、僕が隠れる場所を探してる時に、偶然ハザマさんと会つたんです。最初は敵対したんですけど、僕がKであることを言つたら、攻撃をやめてくれて……それから少し話をしたんです。解除条件の話とか、他の参加者の話とか、ハザマさん7だったんで、仲間を10人集めれば条件クリアだったんで、ラグナさん達にも頼もうと思つてたんですけど……」

「ほう……あのテルミが……（なんだ？ あいつが主犯じゃねえのか？）」

ラグナはまたハザマの仕業だと思つていた為、予想が外れ、戸惑つた。

「はい、続けますね。それで探し出した時なんです。あの場所に差し掛かった時に、Λさんに見つかつたんです」

Λという一言に、3人の視線がカルルに集まつた。

「まさか、ΛがJだったのかよ」

「多分ですが。話し掛けたハザマさんが、Λさんに攻撃されて……。でも、無傷が条件だからって、僕を逃がしてくれたんです。それで、僕はここで隠れてたんです」

「そうか……。テルミのヤローが」

ラグナは立ち上がった。

「カルル、お前はこれからどうする？ やっぱ単独行動か？」

「はい、足手まといになると思いますので、僕は単独で行きます」

「そうか。なら、俺達に行くが、危なくなったらいつでも探せや」

ラグナは一度カルルに向き直り、笑いかける。

「じゃあな、カルル」

「ラグナさん達もご無事で」

そういつて、カルルとは別れた。

「くそっ、兄さんはどこにいるんだ！」

ジンは、さ迷っていた。

ジンのPDAはスピードのA、条件は、ラグナの殺害。

「ん？ あれはハザマか！」

ジンは、ハザマが倒れている廊下に行き着いた。

「これは、切り傷……兄さんか？」

ジンは、少し先から聞こえる声を聞き取った。

「兄さん……」

ジンはアークエネミー・ユキアネサをしっかりと掴むと、声でする方を目指した。

「ここが、2階に上がる階段か。さっさと上がっちまうぞ」

ラグナ達は、フロアに1つしかない階段の前にいた。

「そうだな、居座る必要もないようだしな」

ティガーとラグナは、さっさと階段を登りきった。

レイチェルはナゴから降りると、傘にし、風を発生させ歩く事なく2階に上がってきた。

「便利だな……」

「そうね……あなたと違って、優秀な使い魔ね」

「テツメエ、後で覚えてやがれよ」

「あら？ 何だったかしら？」

「テメエ、マジぶっ殺す」

「やっぱり、兄さんだ」

突如、ラグナ達が上がってきた階段から声がした。
聞き覚えのある声に、3人とも身構えた。

「チツ……大丈夫だよ、大人数相手に単身で突っ込む程、僕は馬鹿じゃないよ」

その証明か、ジンはユキアネサを納めた。

「ってことは、やっぱりお前はスペードのAってこったな」

「そうだよ、兄さんを殺す事が条件だよ」

ジンは、少し俯きがちに言った。

ただそれは、悔しいのではない。むしろ、楽しみにでもしている
ような感じがした。

「兄さん達は、これからどうするの？」

「俺達は3人でいるさ、仲間が増える事にこしたことはねえがな」

「そう、なら、僕は無理だね。」

ジンは一言だけ言うと、ラグナ達の横を通りすぎて行った。

「ジン……」

ラグナは歩き去る後ろ姿に、かける言葉が見つからなかった。

「ラグナ||ザ||ブラッドエッジ。こんな所で立ち止まっていたのは、狙われるぞ」

テイガーの言葉に我に帰る。

「ああ、すまねえ」

遭遇（後書き）

次話お楽しみに

休息1 (前書き)

どうぞ

休息 1

ラグナ達は、眠気に襲われ、近くの戦闘禁止エリアで寝ることにした。

「ここが戦闘禁止エリアか……」

ラグナが、先に扉を開く。

そこには、ノエルとマコトが座っていた。

「あっ……ノエルと、リス」

ラグナが言った瞬間に、マコトが舌打ちした。

ここが戦闘禁止エリアなのを、自覚しているようだ。

「あたしは、マコトⅡナナヤ！ マ・コ・ト・ナ・ナ・ヤ！！」

いいながら、ラグナに詰め寄って行く。

「ああ、マコトだな……ハハッ、すまねえ」

そんなやり取りの中でも、ノエルはしゃべらない。

「どうしたの？ 混ざらないの？」

そんなノエルに声をかけたのは、レイチェルだった。

レイチェルはノエルの隣、マコトとは逆の椅子に腰掛けていた。

「あなたは、私の敵なんですよ。なんでそんな風に、言えるんです

か？」

「そうね、私にとって、誰が死ぬなんてのはどうでもいいことですもの」

レイチェルはどこからともなくティーカップを取り出すと、慣れた手つきでお茶を入れたした。

「おかわりは？」

レイチェルはポットを片手に、ノエルに聞いた。

「いえ、結構です。お気遣い、ありがとうございます」

「あら、ちゃんと礼儀はわきまえているのね」

レイチェルはポットをテーブルに置き、自身も椅子に座る。

「あなたは、私の命を狙っている。それくらいはわかるわ、だけど、それが必然の事なら受け入れるしかないのではなくて？」

「はい。だけど、考えているのと実際では、やっぱり違うと思うんです」

「それはそうね。だけれど、受け入れなくては何も出来ないまま死んでしまうわよ」

レイチェルは、優雅にお茶を飲む。

ノエルは、そんなレイチェルに心を開きつつあった。

「でも、私は……あなたを殺さなくちゃ、生きていられない……」

「それが条件ですものね」

「はい」

そういつて、ノエルは俯く。

だがレイチエルは反対に、落ち着いていた。

「別に、私は死んでも構わないのよ。もう幾年と生きてきて、死ぬ事がどんなことなのかにも少し興味があるしね。あなたが、ずっと生き続けたいと思うなら、私を狙いなさい。それに私は答えるわ」

「レイチエルさん……はい。私、あなたを狙い続けます」

「そう、なら私はそれに応えてあなたをボコボコにしないといけない訳ね。クスッ」

レイチエルの珍しい笑いに、ラグナが振り向いたのはこの際置いておこう。

そして、外に連れ出され、ボコボコにされたのも黙っておこう。

「ふむ……少し、腹が減ってきたな」

ティガーの呟きが、新たな引き金を引きはじめた。

「あっ！　じゃあ、私作りましょうか？」

そう言って手を挙げたのは、ノエルだった。
さっきの話で、活気づいたのだろう。

「それでも、料理は出来る方なんですよ」

そう言ったノエルの言葉に対し、マコトが吹いたのは言うまでもない。

「おい、マコトどうした？」

「なんだろう、急にお腹が痛く……」

マコトはお腹を押さえたまま、奥に消えて行った。

「では、頼めるか？」

「はい、運の良いことに、調理器具はあるみたいですし」

ノエルも奥に消えて行った。

「マコト……大丈夫なのか？」

ラグナの心配をよそに、マコトはトイレでガタガタ奮えていた。
マコト以外は知らない恐ろしい事だからだ。

マコトは士官学校時代に、ノエルのお菓子とやらをいくつも食べさせられている。

その中で酷かったのは、カルルやツバキと食べた……バナナチョコムース。

カルルからは絶賛吐き捨てをくらった逸品。

かくいうマコトも、食べたふりをして、トイレで吐き出した物だ。
そんなものをいくつもいくつも食べさせられたら、恐怖を覚えてくる。

「のえるんが、ご飯を……作る？」

マコトの脳裏には、笑顔でミキサーを取り出すノエルの姿。

「ダメだ！ とめなくちゃ！」

マコトはバツとトイレから飛び出すと、ノエルのところに向かった。

「のえるん！」

「なあにい？ マコト？」

マコトが目にしたのは、鍋からはみ出したおびただしい量の……何？ カレー？ まさかのボルシチ？

マコトの頭の中では、とりあえず液体状の食べ物ばかりが浮かんでいた。

「すぐ出来るから待ってて、マコト」

「う……うん……じゃあ、向こう……行ってるね。ハハ……ハ」

マコトの顔は、今まで見せたこともないくらいに青ざめていた。

「お？ 大丈夫か？ マコト」

「うん、大丈夫だよ。心配ありがとうね、ラグナ君」

「おい、顔真っ青だぞ！ どうした？」

「女特有のあれかしら？」

レイチェルが、悪巧みをしていると言った表情でつぶやく

「女特有のあれ？ ってなんだよ」

「ちよっ！？ レイチェルさん、何言ってるの？ 違うから！」

マコトはすぐに気づき、あたふたと手を動かす。

「女特有のアレとは、生理とか言うものの事か？」

「あら、赤鬼さんは、お利口なのね。それに比べて、負け犬のラグナときたら」

「テメエ、ふざけんなよ！ 知るかよ！ ってか赤鬼のおっさんはなんで知ってやがる！」

「ココノエが入れたデータベースにあったのだが？」

「あいつが入れたのか……」

妙に、納得してしまう。

「っと、そうなのか？」

「いやいやいや、違うって言ってっしょ？」

「ああ、そうか。無理はすんじゃないぞ、ここなら襲われる心配はほとんどねえし。寝とくなら寝とけよ」

「うん、ありがとう……だけどラグナ君達に、これを……」

マコトがラグナに手渡したのは、小髻に入ったタブレットの様なもの。

「なんだよ、これ」

ラグナがそれを受け取り、いぶかしげに見つめる。

「それはアタシが、士官学校時代に作った。対のえるん食用特效薬。のえるんの料理を食べるときは、それを飲んで……じゃないと、悪夢見るよ……」

「出来たよ」

ノエルが、えらく上機嫌で鍋を運んでくる。

ただ、美味しそうな匂い、又まずそうな匂い……むしろ何の匂いもしてこなかった。

「いったい何を作ったんだ？」

「カレーです」

ノエルが置いた鍋には、なみなみと黒い液体が入っていた。

「おい、マコト……1個もらうぞ」

ラグナは苦笑いを浮かべつつ、1つ飲み込んだ。

「私ももらおう」

テイガーもラグナに1つだしてもらい、飲み込む。

「うさぎは？」

「あなた、私を殺す気なの？ いるに決まっていますでしょう」

そう言って差し出された手に、1つ置いてやる。

レイチェルはそれを口に放り込むと、自分が煎れたお茶で飲み込んだ。

ラグナは、今にも死にそうなマコトの口に1つ放り込み、水を口にいてやる。

マコトはちゃんと飲み込んで、小さい声でお礼を言った。

「皆さん、さっきから何してるんですか？」

不思議に思ったのだろう、ノエルが声をかけてきた。

「いやいやいや、なんでもねえよ、なんでも、なあ赤鬼？ アハハ」

「ああ、もちろんだ」

そういつてテイガーはご飯を皿に盛り、カレー？ をかける。
だがしかし、無臭だった。

「俺も……もらうわ」

ラグナもテイガーにならない、ご飯を入れ、カレーらしきものをかける。

「ラグナ、私の分もお願い」

レイチエルが、ラグナに頼む。

普段なら突っぱねているだろうが、こればかりは引き受けた。

「ほらよ、うさぎ」

「ありがとう」

レイチエルは、その皿を見て咳込んだ。

「マコトは？」

ラグナが、マコトに問い掛ける。

マコトもお腹は減っているのだろう、首だけを縦に振った。

「ほら、置いとくぞ……ノエルは？」

「あつ、私ご飯作ってたらお腹いっぱいになるんでいいですよ」

「便利な体だな……。とりあえずいただくぜ……」

ラグナはスプーンを手にして、ノエルのお手製カレー？と対峙する。

「いただきます」

意を決したラグナは、一口ほうり込んだ。

「ん？　なんだ？」

だがその表情は、疑問符を浮かべていた。

「ふむ……これは……」

「「味がねえ」」

その場にいた4人が思ったことが、綺麗にハモる。
ラグナは横目でテイガーを見ると、目だけで会話を開始した。

「（おい、どうやったらカレーの味が無くなるんだ？　ルー入れてないならまだしも、この色は入れてるだろ）」

「（私に聞くな！　むしろ、私が教えてほしいくらいだ）」

2人とも、カレーがどうやったら無味無臭になるのかに戸惑った。
レイチェルに至っては、皿をかつかつと突いている。

高貴なお嬢様にしてはなんたる下品か……と思うくらいに……
マコトは、何故だが驚いた表情を見せていた。

「おい、マコト。お前なんでそんなに驚いてんだ？」

「のえるんの進歩だよ……前までカレーって言ったら、魚入ってたし……」

「カレーに、魚……」

想像してみてほしい。

尾頭付きの魚が、どす黒いドロドロした物のなかに野菜やら、肉やらとが混ざり合った何かを……

「おうえっ……」

ラグナは色々なモノが口から出そうになり、手をあてた。

「ってことは、この無味無臭のカレーは、あいつが作った中では最高傑作なのか……」

「うん……この無味無臭でも……のえるん、よくやったよ」

そういつてマコトは、泣きながら食べはじめた。

味がしないゝとかたまに言ったりしながらだが……

「だけど、味がないだけで……食べねえこたあねえか」

ラグナも少しずつだが、スプーンを運ぶ。

レイチェルもさっきまではかつかつと突いていたが、出てきても同じだろうと思ったのだろう。しかめっつらで、ゆっくり食べはじめる。

「腹ごしらえにはなった」

ティガーは、さっさと食い終わっていた。

「赤鬼、早いな……」

「食えぬものではないと判断したのでな」

そういつて席を立とうとしたティガーを、ノエルがとめた。

「なんだ？」

「いや、デザートも作ってあるんですよ」

「デザートまでか……」

ティガーは、またラグナに視線を向ける。

「(まさか……また無味無臭か?)」

「(俺が知るかって!)」

「(チツ)……そうか、それでは用意してもらえるか？」

ティガーの言葉に、ルンルンとノリノリで厨房に入って行くノエル。

それを、乗り気ではないラグナとティガーが目で追う。

「特効薬はまだあるのか？」

「ねえな……マコトに飲ませたので最後だ」

「お待たせしましたあ」

ノエルが持ってきたのは、カップに入っていて、フワフワしたものであった。

「なあ、赤鬼……なんだあれ？」

「わからん……」

ラグナとティガーは、揃って溜息をつく。

「どうぞ、ラグナさん、ティガーさん」

笑顔で渡し（押し付け？）てくるそれを、手に取り、更に溜息をつく。

「なあ……ノエル、これなんなんだ？」

「え？ それは、チョコレートバナナムースですよ」

その名前を聞いた瞬間に、マコトがテーブルに突っ伏した。

「あれ？ マコト食べないの？」

「うん……お腹いっぱいだから」

「そかぁ……じゃあラグナさんにあげるよ」

ラグナは力のかぎりに吹き出す。

「はい？ どうしたんですか？」

「あつ、いやぁ～なんでもねえ……そういや、うさぎは？」

「レイチェルⅡアルカードならカレーを食べた直後に、ベッドルⅠ

ムに向かったが？」

「そうか……」

「じゃあ、レイチェルさんのはティガーさんどうぞ」

「あつ、ああ……」

ティガーの大きな手の平に、小さなカップが置かれる。

「じゃあ、いただくぜ」

ラグナは、一口分すくおうとする。

すると、ムースにも関わらず、スプーンが刺さるときにサクッと音がした。

「おいっ、今、サクッ！ って言わなかったか？」

「なんのことですか？」

ラグナの反論は、ノエルの天然に打破される。

「チッ」

ラグナの舌打ちはノエルに聞こえたのだろうか？
否、ノエルはティガーの方へと行ってしまった。

「まったく、ムースじゃねえのかよ」

そういうながら、スプーンをいれていく。

すると刺すときと違い、泥に足を突っ込むような感覚が襲った。
だが、その感覚は、ムースならば当たり前の感覚なのに、何故か違和感を覚えた。

「どうやって作るんだ？」

その一言に尽きる。

外はサクリ、中はシツトリ

ガチンッ！

「ガチン？　なんだ？」

ラグナのスプーンに、固い何かが当たる。

「ムース……だよな……」

ラグナはその固いものを避けて、口に運ぶ。

「なんだ……外はサクサク、中はべちゃべちゃ……真ん中はガチガチ……なんだこれ？」

苦笑いが浮かぶ。

それと同時に冷や汗も……

冷や汗と同タイミングで、急激な腹痛もあらわれる。

「むうおお……」

ラグナは、トイレに急行した。

ティガーも、少し遅れてついてくる。

「おい！ 貴様！ ラグナⅡザⅡブラッドエッジ」

「黙れ！ 少し待ってろ！」

そんな様子を見ながら、元凶は呟いた。

「もお、焦って食べるからですよ」

その日の夜、ラグナとテイガーは悪夢にうなされた。

休息1（後書き）

次話お楽しみに

休息2（前書き）

どうぞ

二名の方から指摘があり、かいへんしました

休息2

開始から31時間26分

ラグナ達は、起き出した。

なんともありがたいことに、キッチンに立っているのはマコトだった。

「マコト……ありがとうな」

「さすがに二日連続は、ラグナ君もきついでしょう……」

ノエルの料理の味を知ってしまった以上、マコトが料理をしているのが、このうえな幸福な事だろう。

「もうちょっとで出来るから、皆を起こして来て」

「ん、ああ」

ラグナは今来た道に戻り、ベッドルームに向かった。

「おら、赤鬼！ くそうさぎ！ ノエル！ 起きろ、朝だぞ」

「うむ……すまないな、ラグナザブラッドエッジ……この匂いは、ノエルではないのか」

「ああ、ありがてえことにマコトが作ってくれてる」

「幸せな事だな」

二人はしみじみと感じていた。

「あつ、朝ごはん作らなきゃ」

ノエルは、寝ぼけ眼をこすりながらつぶやく。

「お前はいいから用意しやがれ」

「え？ ラグナさん、おはようございます」

「お前、俺がいたの気づいてなかったのか？」

「はい……今気づきました」

「まあいい、用意して出てこいよ……っと」

ラグナは、レイチェルが寝ているベッドに向かった。

「ぶっ！？　なんだこれ？」

レイチェルが着ていたパジャマ？が、かなり子供っぽかったのに驚く。

「蛙やら蝙蝠やら猫って……」

そう言った時、レイチェルは起き出した。

「おっ、起きたか、おはびよっ!？」

レイチェルの、フルスイング平手打ち……と見せかけたギイの猛
タックル

「なっ、テメエ何しやがる」

ラグナは飛んできたギイを、目一杯引っ張りながら怒鳴り付ける。

「うるさいっす！ 姫様の寝顔を覗くなんか無礼にもほどがあるっ
す！」

「女の寝顔を覗くなんて、どんだけ野蛮なのかしらね」

「ちっ、折角起こしてやってるのによ」

ラグナは頭を掻きむしりながら、ベッドルームを出ようとした。

「そうだ……そのパジャマは？」

「ん？ これか？ これはヴァルケンハインが作ってくれた物よ」

「あのジイサンがねえ……」

ヴァルケンハインとは、レイチェルの執事、先代アルカード家か
ら仕えているらしい。

ちなみに伝説の六英雄の1人。

「ええ」

レイチェルは、ふとノエルを見る。

「今日は違うのね」

「ああ、今日は代打だ」

「よかったわ」

レイチェルは着替えを手にとると、風を巻き起こし、中に消えていく。

「あれ、便利だな」

「そうだな……」

「まああいつは、着替えたら来るだろ。お前も着替えたら来いよ」

「え？ あっ、はい？」

「ちよっ、お前！？ 待て！ 俺達出るから待て！」

ラグナ達の存在を忘れていたのか、既に着替えはじめようとしていたノエルが素っ頓狂な声をあげる。

「後でな」

小さな音を立てて、扉が閉まる。

「おい、あいつってあんな天然キャラだったか？」

「いや、だから私に聞くな！」

「まあいいか……それより飯だな。昨日出し過ぎて、腹減ったしよ」

「同感だ……」

2人は、広場に出た。

「おっさんじゃねえか」

広場には先客がいた。

バングとライチだった。

「おお、ラグナ殿ではござらんか。それにティガー殿も」

「俺ら以外に、ノエル達もいるがな」

「そうでござったか。いや、仲間が見つけれれてよかったでござるよ」

「ということは貴様達の解除条件は、殺し合ではないということだな」

「拙者が6、ライチ殿が9でござる」

「6と9か……相性の悪いことだな」

「拙者はもう覚悟を決めたでござるからな……ライチ殿の為ならば、体を張れるでござる」

「ライチ……いいやつが6でよかったな」

そこまで無言だったライチが、振り向く。

「ええ」

ライチは、相当悩んでいるようだった。

バングは口では、いいと言ってくれる。

だが、それをする事で、バングの命がなくなる。

既に時間の制限的に、バング以外対象がいなくなっていたのも悩みの種の1つだった。

「ライチ殿」

そんなライチに声をかけたのは、またしてもバングだった。

「ライチ殿、拙者は気にするなと言ったでござる。ならば、気にしなくていいでござるよ」

「でも……」

「でも、はなしでござる」

「はい……」

バングは、そっとライチの手を握る。

「ライチ殿は拙者が必ず護るでござるよ」

そんな2人を尻目に、ラグナとティガーは呟いた。

「なあ、こいつら俺達の存在忘れてるよな？」

「だろうな……」

「出来たよ」

昨日のカレー？と違い、とてもいい匂いが漂ってくる。

「簡単だけど……はい」

「マコト……お前、ナイスだ」

「ありがたい……またあれを食うのは御免だ……」

「私もあれはもう嫌だよ……」

今度は、3人揃ってため息をつく。

「さあて食うか」

朝食は、いつから炊いたのか白ご飯に卵焼き、焼き鮭とみそ汁。どれもこれも、ノエルのととは比べ物にならなかった。

「改めて食に感謝出来るな……」

「うむ……いただこうか」

そしてティガーとラグナは、一足先にご飯を口に運ぶ。

「うめえよ！ マコト、お前やるなあ！」

「まったくだ、ちょうどいい加減だな」

「いやいやノエルとルームメイトやってると、ご飯作らなきゃ地獄だからね」

「……それもそうか」

そういつつ美味しいご飯を、口に運んでいく。
その匂いに吊られ、レイチエルやノエル、バング達も机に集まった。

「お腹減ったにやす」

タオカカまで……

「おっ？ いい人にやす」

「おお、タオじゃねえか……ここじゃ攻撃しない方がいいぞ」

「なんでにやす？」

「ここは戦闘禁止エリアで、攻撃したら死ぬぞ」

「にゃんと！ そうにやすかあゝむさい人とかいたから首輪くれるかなあゝって思ったにやすけどゝ仕方ないにやすねえゝ……それよりお腹減ったにやす」

「おおゝい、タオちん。こっちおいでよゝ作ってあげるからさあ」

マコトがテーブルのあいた席に、タオを呼ぶ。

「ほんとにやすか？ 助かったにやす」

「ほい」

マコトの料理は、ほぼ一瞬で出てきた。
それを、食べはじめるタオ。

「美味いにやす」

「よかったあゝにしても久しぶりだねえゝたおちん」

「そうにやすねえゝない人も久しぶりにやす」

そう言っ、ノエルにも挨拶をするタオカカ。

タオカカに言われたことを気にしてか、胸辺りを障りだすノエル。

「ない人……」

ノエルは、マコトとライチを交互に見ながら呟いていた。

「これで13人中、8人が一緒にいることになるんだな……」

2階の戦闘禁止エリアにはラグナ、レイチエル、ティガー、ノエル、マコト、バング、ライチ、タオカカ。

合計8人が、集まってご飯を食べていた。

「皆、本当は仲いいのにな……」

「言ってもしかたないでござろう……出来るだけ、戦わぬようにせ

ねばいかんでござる」

「さて……マコト、美味かったぜ」

ラグナは皿を片付け、荷造りを始めた。

「おら、うさぎも赤鬼も……行くぞ」

「仕方ないな……」

テイガーも、重たい体を起こす。

「わかったわ」

レイチエルもお茶を飲み終わると、そのセットをどこへともなく
なおす。

「ほんじゃ、俺らは先に行くわ」

ラグナ達の用意は、あっさり終わった。

「じゃあな」

ラグナは、一言だけ呟いて背を向けた。

「行くぞ、赤鬼！ うさぎ」

テイガーとレイチエルは、ラグナの後についていく。
それを、皆が見守っていた。

休息2（後書き）

次話お楽しみに

悲劇（前書き）

どうぞ

悲劇

開始から35時間52分

ツバキは目標である、ジンと接触していた。

「お兄様……」

「ツバキか」

ジンの目は冷ややかで、目に映る全てを凍らせてしまいそうなくらいだった。

「お兄様は、ラグナ・ザ・ブラッドエッジを？」

「ああ、兄さんを殺して、生を勝ち取るんだ。それを邪魔するのなら、僕は君を殺す」

その時のジンの目からは、本気だと言ったことがまじまじと伝わってきた。

「大丈夫です、お兄様。私は、お兄様の邪魔はしないますから」

「ふん……そうか」

ジンは、くるりと身を翻す。

「審技・閃ク壺ノ撃」

その背中に、開いた本を向けて、ツバキが突っ込む。

「なんのつもりだ？ ツバキ」

「ごめんなさい……私、お兄様を！」

弾ける音が響き、2人は離れる。

「くっ、氷翔剣」

ジンはすかさず、氷でできた剣を飛ばす。

「当たりませんよ、審技・地ヲ抱ク衣！」

ツバキが祈りを捧げると同時に、氷翔剣は消え去り、ツバキを黄色い光が包んだ。

「ツバキ……君も、障害なんだな……」

「なんとわれようと、私はあなたを倒します」

そう言って、ツバキは飛び上がる。

ジンはそれに対抗するように、ユキアネサを構える。

「審技・空ヲ翔ル翼！」

ツバキは大きな羽を広げたかと思うと、軽く畳み、ジンに向けて飛来する。

「氷翼月鳴！」

ジンは、瞬間的に氷の弓を作りツバキ目掛けて構える。
矢も氷で出来ている。

「はああああ！」

「うあああああ！」

2人の技が、ぶつかり逢う。
だが相打ちになり、2人の攻撃は掻き消える。

「審技・空ニ閃ク光」

ツバキの前に、光球が現れる。

「審技・空ヲ翔ル翼！」

ツバキはその球の中に、自ら突っ込んだ。
すると、ただ浮いていただけの球体が、ツバキを包み、つむじ風の様な鋭さを与えた。

「ちっ……ククク、アッハハハ……虚空刃……」

ジンは、右手を前に出した。
その瞬間、赤い円が空中に刻まれる。

「まずい」

ツバキがそう思った時には、すでに体が触れてしまっていた。

「雪風！」

ジンが叫ぶと同時に、刀を振り抜く。
ジンのカウンターをくらい、ツバキはかなりの距離を弾き飛ばされる。

「くっ、お兄様……あなただけでも」

「対象……確認……殲滅……開始・開始・開始」

聞き覚えのある声はツバキの後ろ、ジンの前から響いた。
その声は、ツバキの真後ろ、通路と通路が交差する場所からだった。

そしてそれは、Λ-11だった。

「殲滅・開始……レガシーエッジ」

Λ-11は、右手をジン目掛けて振りかざす。
すると空中に、赤黒い穴が広がり、そこから数え切れない剣が飛び出し、ジンを襲った。

「くそっ！」

ジンは身を翻し、違う方向へと逃げ出す。
そんなジンは、マコトと擦れ違った事に気づかなかった。

「今の、ジン先輩じゃあ」

マコトは嫌な予感を覚えた。
ジンを狙うのは、4、10、11だけだ

そのうち10と11はジンを、直接狙うものだ。

4はもしかしたら狙う可能性がある。だが、4はタオカカ

マコトが部屋を出るとき、タオカカはまだ部屋にいた。

だからタオカカはありえない。

どちらからも狙われる中で、あんな逃げ方が出来る。

導き出される答えは……

ジンを狙っていた10かJが、逆に襲われた。

「今会ってないのは……まさか？ ツバキ？」

マコトが、顔をあげた時だった。

「きやあああああああ」

悲鳴とともに、何かが突き刺さる音や、何かをえぐる音が聞こえてきた。

「ツバキ！」

マコトは、走り出した。

亜人種特有のスキル……それは探索が早いこと。

「ツバキ！ ……?!」

通路にたどり着いたマコトが見たのは、体中に剣が突き立てられ、血に染められて、変わり果てた友人

そして、それをじっと見つめるもの。

「目標……確認……殲滅・開始」

またもΛ-11は、手を延ばしてくる。

その周りから、周囲に浮いている剣がマコト目掛けて飛んだ。

マコトは舌打ちすると、壁に体を預け、一時的に待避した。

「どっか逃げなきゃ……」

通路からは機械独特の音を響かせながら、Λ-11が近づいてくる。

「逃げなくちゃ……ん？ エアーダクト」

マコトの視線の先、天井に備え付けられたエアーダクトだった。

「ええい、一か八か！」

マコトは一気に踏み込むと、エアーダクトに突入した。
それと同時に、少し遅れてΛ-11が下に来た。

「熱源・探知・不可……」

Λ-11は、マコトを見失った様だった。

「対象……ロスト……探索・再開」

Λは、どこかへ去って行った。

それを見送ってから、マコトは飛び降りた。

「ツバキ……」

友人の元に、行きたかった。
少しでも、一緒にいたかった。

「ツバキ……」

何度見ても、状況はかわらない。

親友は醜く切り刻まれ、血まみれのまま動かない。

「ツバキ……ごめんね、私が早く来ていれば……うわああああん！
ああああ」

マコトの目からは、大粒の涙がポロポロと零れてきていた。

「おい、マコト！」

ついさっきまで、聞いていた声がした。

「ラグナ君」

「おい、それはツバキⅡやヨイではないのか？」

テイガーが、マコトの横で血みどろになっている人を指差し言った。

「うん……△にやられた」

「そうか……そういえば、お前のナンバーって」

ラグナは嫌な納得と同時に、嫌な予感がした。

「うん、アタシのナンバーは5……条件失敗だよ」

「マコト……」

かける言葉がないのは、ラグナもティガーも同じだった。

「なら、一緒に来ないかしら？」

その中で声を出したのは、レイチェルだった。

「もしかしたら、その首輪を外すことが出来るかも知れないし」

「うん……いいかな？」

「ああ、ついて来いよ」

「ありがとう……ラグナ君、ティガーさん、レイチェルさん」

マコトの目には、うつすら涙が浮かんでいた。

悲劇（後書き）

次話お楽しみに

逃走劇（前書き）

どうぞ

今回はバングが輝きます

逃走劇

その頃、戦闘禁止エリアから一緒に出たノエル、バング、ライチは3階に向かっていた。

「ノエル殿の条件はレイチエル殿でござるか……参ったでござるなあ」

「そうね……少尉さんの条件を満たせば、ラグナやむろんレイチエルも死ぬことになりかねないのね……」

「はい……だけど、私はレイチエルさんを追うって決めました」

ノエルの決意は、固いようだった。

「ならばばらくは、一緒にいけるでござるな」

「はい……痛いっ?! 何?」

ノエルが、急に頭を押さえしゃがみ込む。

「どうしたでござる? 大丈夫でござるか? ノエル殿?」

「少尉さん? 少尉さん」

「痛い、痛い……いや、やめてよ……やめてえええ!」

ノエルは頭を押さえながら、狂ったように叫びだす。

「ライチ殿、とりあえずノエル殿を運ぶでござる」

「そうですね……私が前に行きますので、少尉さんを頼めますか？」

「もちろんでござるよ……軽いのでござるな、これなら走れるでござる」

「バングさんが、男性でよかったです。さあ、こっちです」

ライチを先頭に、バングが後を追う。

「ライチ殿、この部屋はどうでござろう？」

バングが指差したのは、通路脇にあった小部屋。

「わかりました」

2人は、その部屋に隠れることにした。

「大丈夫？ 少尉さん？ 大丈夫？」

バングは、部屋にあったベッドにノエルを寝かせた。

「大丈夫でござろうか？」

「わからないけど、多分、一時的なものかと……」

すると、ノエルは目を醒ました。

「ライチさん、バングさん……」

「あら、少尉さん。気がついたのね！ 待ってて、今お茶いれるから」

「逃げて……逃げてください」

ノエルのいきなりの言葉に、顔を見合わせるバングとライチ。

「ダメ……早く、あれが……あれが来てる」

ノエルは酷く何かに怯えるように、体をふるわせていた。バング達も、嫌な予感が頭を過ぎらずにいらなかった。

「バングさん！ ライチさん！ 逃げて！！」

そういうのと同時くらいに、部屋の扉が大きな音を立て、凹んだ。

「なにごとでござる?!」

「あいつが、来た……」

ノエルの言うあいつがなんなのかは、バング達にはわからなかった。
だが、やらねばやられる状況。

2人は、身構えた。

そして、扉が内側に思い切り吹っ飛んだ。

「目標……確認・戦闘開始」

そこに入ってきたのは、Λ―11だった。

Λ―11は入ってくるや、自身の周りに浮く剣をライチとバング目掛けて放つ。

それをライチは万点棒、バングは鉄甲で弾いていく。

「ライチ殿、後ろは拙者が護るでござる。その間にノエル殿を」

「わかったわ」

ライチは自分に飛来する剣を弾くと、ベッドでふるえるノエルを抱き抱えた。

それを横目で確認したバングは、思い切り突っ込んだ。

剣は危険度の高い所に来るものだけを弾き、出来るだけスピードを失わないようにした。

Λ―11とバングの体がほぼ触れ合った瞬間、バングは掌を突き出すように手を揃えて、体を縮める。

「うおおおお！ バング双掌打・金剛戟！」

バングはその手を、一気に突き出す。

すると、腕が炎を纏い、爆発。

Λ―11は、後ろの壁にたたき付けられた。

「今でござる！」

ライチは、その隙にΛ―11とバングの間を走り抜けて行く。

バングは、それを後ろから保護する形でついていく。

「ありがとう、バングさん」

「礼は、逃げ切ってからでござる」

2人とも、Λ―11がああの程度で壊れない事くらいは承知していた。

だから、全力で逃げていた。

「ライチ殿！」

バングは、一瞬でライチの前に回り込む。

「バングさん？」

「せやああ！」

バングは掛け声とともに、足元を蹴り払う。

すると、ライチの前から迫っていた回転する剣が消滅した。

「危なかったでござるな……」

「バングさん……」

ライチは、振り返ったバングの後ろを指差していた。

バングもその方向を見る。

「転移……位置確認・正常……殲滅・再開」

Λ―11が時限干渉し、ワープホールを開いたのだろう。

「ライチ殿、下がっているでござる」

「バングさん！」

「拙者に任せるでござる。たまには頼ってもらいたいでござるよ」

そういうとバングは、ライチ達に背を向けて、構えた。

「対象・確認……殲滅・再開」

「漢、シシガミⅡバング！ いざ、参る！」

バングとⅡがスタートをきったのは、ほぼ同時だった。

それぞれの攻撃を打ち消しあい、更に攻撃を打ち込みあっていく。

「バングさん……」

ライチは、自分達の為に闘うバングを、心の底から応援していた。

「うおおららららあ！ でやあ！」

一際大きな音が響き、両者が離れる。

「らちがあかんでござるなあ」

バングの視界は、爆発による粉塵で悪くなっていた。

「バングさん……」

「気は、抜けんでござるよ……」

刹那、バングが顔をしかめた。

「ライチ殿！ 伏せるでござる」

バングはライチの方に向き、二人に覆いかぶさる様に立ちはだかる。

それと同時に、土煙が掻き消え、無数の剣がバング目掛けて飛来していた。

「空間固定……レガシーエッジ」

Λの無情な声が響く。

そして、剣はバングの体を傷つけていく。

幾つの剣をその身に受けたのか、今ではわからない。

バングの体からは、血が溢れ出ていた。

「バングさん、バングさん！」

「おお、ライチ殿……無事でござったか。それは……よかったでござるよ」

そういつて笑う顔も、辛そうに冷や汗をかいていた。

「目標・健在……殲滅・再開」

Λの声がする。

バングはゆっくり振り返ると、両手を脇腹に沿え、腰を落とし踏ん張った。

「ぬおおおおおおおおおお！！」

その時、バングの頭の中を、初めてライチに逢った時の記憶が駆け巡った。

……「申し訳ないでござるが、この店にはどう行けばいいのでござろうか？」

「はい？ ああ、このお店なら、この道をまっすぐ行って……」

わかりやすく説明してくれて……
何より笑顔が眩しかった。

……………

「拙者は、その笑顔を守りたい……。その為ならば！」

バングの目に、火が灯る。

「獅子神忍法……」

優しい声……

「究極奥義……」

自分が、心の底から愛した女性。

「萬駆風林火山……」

その女性を、護りたい……！

バングの闘気が、具現化し光を纏う。

それは、全てを照らす太陽が如く暖かく。
全てに活気を与えるような光。

「バングさん……」

「ライチ殿……拙者は、必ず貴女を守り抜くでござるよ」

バングは振り返らず、ただΛだけを見据えて言った。

「拙者の……生き様を見ていてくれでござるよ！」

バングは、駆け出す。

Λという強大な敵に、臆することもなく。

「うおおおおお！」

逃走劇（後書き）

次話お楽しみに

別れ（前書き）

どうぞ

今回短いですf ^
| ^ ;

別れ

突然、壁が震えた。

「なんだ！」

「わからん……、あまり遠くはないようだ、行くぞ」

ラグナ達は、音の発生元を探すために走り出した。

――――

「目標……停止確認、損傷・中……連続運用・可能……殲滅・再開」

Λの前には、立ったまま動かない人物がいた。
シシガミⅡバングだった。

その一部始終を見ていたライチは、動けないでいた。

「目標……殲滅・開始」

Λが手を挙げるのと同時に、ライチはノエルをたたき起こしていた。

「少尉さん！」

その言葉に、ノエルは、はっと顔をあげる。

「なんですか？　ライチさん」

「よかった……少尉さん。私が時間を稼ぐから、その間に……」

ライチはノエルから手を離すと、万点棒を手にしち上がった。

「え？ バングさんは？ あれ？ 私なんでだろ？」

ノエルは、状況が飲み込めないでいた。

起きたら急に逃げろといわれ、ライチさんな闘う準備をして、バングさんはいないし、壁は崩れてて、目の前にΛ—11がいて……

「?! バングさん」

Λを見た時、その奥に佇むバングの姿を目にした。

「嘘ですよね……バングさん……」

「少尉さん！」

ノエルは急に怒鳴られ、ビックリする。

「私は、あの人を置いていけない……だから、少尉さんは逃げて、早く！」

ノエルは、ライチに突き飛ばされる。
思わず転びそうになったが、堪える。

「ライチさん」

「少尉さん……元気でね」

ライチは一言だけ言うと、Λに向かって行った。

「そんな……そうだ、ラグナさんなら」

ノエルは身を翻し、ラグナを探しに行った。

ライチを助けることを胸に決めて……

————————

「どこだよ……くそお！」

ラグナ達は、迷っていた。

一度しか聞こえなかった音を辿る方が、難しいのはわかりきっていた。

「手掛かりがなさすぎる……」

その時だった、荒れた呼吸と、ラグナの名を呼ぶ声が聞こえた。

「ラグナさん！」

「ん？ ノエル」

ノエルはラグナの胸に飛び込むように突っ込んでくる。

「どうした？」

「ライチさんが……バングさんがああ」

ノエルは、目から涙を流しはじめる。

「女医さんとバングのおっさんがどうしたんだ？」

「Λに……Λにやられてるの！」

ノエルの言葉に、3人の目の色が変わる。

「ノエル、案内しろ！」

ラグナ達は、ノエルを先頭に走り出した。

——————————

「目標……活動停止を確認……殲滅・完了……探索モードに移行」

Λは、目の前に倒れる女を見下ろしていた。

その女は、死に際に先に死んだ男の元にはいずって行った。
だが、死ぬというのに、その女は笑っていた。

Λは剣をしまい込むと、ふらっとどこかへ行ってしまった。

——————————

「くそっ！」

ラグナは何度目かわからないが、壁を打った。

ラグナ達の前には、立ったまま死んでいるバングと、その側で体を寄せて死んでいるライチ。

2人とも、有り得ない量の刀傷を受けていた。

「Λか……」

「そのようだな」

「これで、あの子に殺された人が4人になったわけね」

その中で、ノエルが泣き崩れる。

マコトも、そのノエルの側で一緒に泣いていた。

「だけど、女医さん……幸せそうな顔してんな」

ラグナの言うとおり、ライチの顔は、優しく微笑んでいた。

「ライチは、最後に見つけたのだろうな……心から慕える人を」

「ああ……すまねえな、もっと早く来てやれたら、助けられたかもしれないねえのにな」

ラグナは、2人の前にしゃがみ込み、黙祷を捧げる。

それにならない、テイガーやレイチエル達も黙祷を捧げる。

「2人の分まで生き残ってやらねえとな……」

ラグナ達は、覚悟を決め立ち上がる。

「では、私はこれで」

ノエルは、すぐにラグナ達から離れて行った。

「のえるん」

「仕方ないわ……行くわよ」

珍しくレイチェルが前に行く。
ラグナ達も、後ろをついていく。

—— ——— ——— ——— ——— ———

「兄さんはどこにいるんだ」

ジンは、3階に上がっていた。

「くそお、兄さんが見つからない……」

ジンはイライラがとまらなかった。
目標であるラグナが見つからず、ずっと迷っていたのだからわけ
もない。

「くそ、ユキアネサも兄さんを探知出来ないし……」

ジンは、疲れのあまり、壁にもたれ掛かった。

「早く見つけないと……」

ジンは再び身を起こすと、また道を歩きはじめた。

—— ——— ——— ——— ——— ———

別れ（後書き）

次話お楽しみに

五人目（前書き）

どうぞ

五人目

「にやす〜誰か首輪くれないにやすかねえ〜」

タオカカは呑気に2階を徘徊していた。

「とりあえず〜上に行くにやす」

階段を探して、道を練り歩く。

その目の先に、剣を浮かせた女がいた。

「にやす！ いいところに見つけたにやす……意地でも奪い取るにやす」

タオカカは、音を立てぬように近づく。

「にやすっ！」

そして、タオカカは一気に飛び出す。

持ち前の機動力の高さが働き、とても優位な位置を取った。

「目標・確認……迎撃・開始」

Λは一瞬だけ身を引く。

それだけで、タオカカの伸ばした手はギリギリとどかなかった。

「待つにやす」

タオカカは地面を蹴ると、高くジャンプする。

そして天井に手をつく、すぐに飛び出す。

「目標・接近……」

Λの姿が、線を引きながら消える。

「にやにや？ どこ行ったにやすか？」

キヨロキヨロと辺りを見回す。

「目標・捕獲」

タオカカは、Λの声がした方を向く。

それと同時に、タオカカの首をΛが掴み、持ち上げる。

その首の周りには、Λがつれている剣が、八方からタオカカを狙っていた。

「やばいにやす」

「目標・殲滅……完了」

Λの最後の一言同時に、周りを取り巻く剣が一斉にタオカカの喉目掛けて飛び出す。

「いまにやす！」

タオカカは、足を思い切り振り上げる。

その蹴りは、Λの頭を跳ね上げた。

それによりΛの拘束が緩む。

「にやす」

タオカカは地面に着地すると、身を屈めて剣の攻撃をかわす。

「目標……健在……殲滅・再開」

そのΛの言葉と同時に、タオカカは地を蹴った。

「行くにやす！」

タオカカは、そのままΛのすぐ傍まで飛び寄る。

Λはそれに反応し、タオカカが降り立った地点を見る。
だがそこに、タオカカの姿はなかった。

「にやす！」

タオカカの掛け声と共に、Λの真上からタオカカが飛び出す。

タオカカはΛの傍に降りた瞬間に、勢いを殺さないように跳びはね、天井に張り付いていたのだった。

タオカカの攻撃は、Λに命中した。

タオカカは更に空を蹴ると、Λに向けて突っ込む。

「猫の人直伝にやす！」

そのままの勢いで突っ込み、自身の手で幾度となく殴り付ける。
獣兵衛直伝・ヘキサヘッジ

タオカカの得意とする、機動性とリーチを最大限に生かした技。
タオカカは、Λの懐を何度も殴り付けた。

「終わりにやす！」

タオカカは最後の一打を、アッパーに持ち込もうとした。打ち上げてしまえば、タオカカの得意な空中戦が出来る。だがそのアッパーは、Λがのけ反ってしまった為に外す。

「にやす?!」

タオカカは案の定、バランスを崩しかける。

Λはすぐに体勢を整えると、無防備なタオカカの首に手を伸ばした。

その手は、静かにタオカカの首を掴む。

「ムラクモユニット開放 …… 次元干涉虚数法陣展開」

Λの言葉の直後、タオカカの手足首の先が赤黒い渦に飲み込まれ、身動き出来なくなった。

「にやす? 動けないにやす」

「アイデア機関解放……」

Λは、右手を天高く振りかざす。

その先、ちょうどタオカカの頭上あたりに光の渦が開く。

「何がおこるにやす?」

タオカカは、その渦を見つめる。

「その器、白銀の刃にして蒼の根源……八岐の尾より出で、世界を

否定し肅清する者よ」

Λがそこまで言った時、渦の中心から平たく赤い物体が顔を覗かせた。

それは、とてもこの世のものとは思えないくらいに大きな剣だった。

「にやにやつ?！」

タオカカも、目を疑った。

その剣が、自分を狙っている。

たとえば身動き出来たとしても、避けるのが精一杯なのに。

今の自分は拘束され、避けることなんて出来ない。

「薙ぎ払え!」

Λが、掲げた右手を振り下ろす。

その動きに合わせて、剣が落ちる。

――――

今日だけで、二度目の振動。

それはさっきの振動とは、遥かに規模の大きなものだった。

「なんだ?」

ラグナは、少しふらついた。

マコトも同じようにふらついたが、テイガーがその身を支えた。

「ありがとう、テイガーさん」

「かまわない、助け合うのは重要なことだからな」

「なあ赤鬼……今の近いかな？」

「さあな、揺れただけでは特定しにくい」

テイガーも、流石に地震探知器なんて機能は、持ち合わせていない。

「待ってなさい、ギイ」

「なんですかッス？ 姫様」

「超音波で場所の特定をしなさい」

「了解ッス！ ラグナ以外は耳を塞ぐッス」

ギイは、口を開く。

それと同時に、マコト、レイチェル、テイガーは耳を塞ぐ。

「ちょっと待て、なんで俺以外なんだ？」

ラグナの反抗には目もくれず、ギイは超音波を放つ。

「ああああぐああああ」

ラグナは、頭を押さえて転げ回る。

だがラグナ以外は皆無事で、ラグナを哀れんだ目で見つめていた。

「姫様、姫様く見つけたッス」

「なら案内なさい」

「了解ッス」

ギィは、前を先導していく。

それに、ラグナ以外の三人はついていくが、ラグナ自身は耳なりが止まず、しまいに頭痛を引き起こすなど災難な目にあい、頭を押さえながら悶絶している。

「ちよつと、待てやあああ」

――――

「酷いわね……」

レイチエルが見つめていたのは、背骨ごとボツキリいかれたタオカカだった。

「やはり刀傷か」

「たおちん……仇は取るからね」

それに遅れて、ラグナが到着する。

「お前ら……待てよ……おい、それ」

ラグナの目にも、しっかり映った。

「タオカカだ、ほぼ確実にΛにやられたのだろうな」

「チッ、またΛのやつかよ」

「何とも言えないわね」

「ああ、タオ……お前の分も、背負ってやるよ」

ラグナは、目をつぶる。

皆も、それぞれで黙祷を捧げる。

「行くぞ！ Λの奴をぶつつぶす」

ラグナは身を翻し、3階に上がる階段の道を歩きだした。

――――――

「兄さん……どこにいるんだ……」

ジンは、今だに3階を探し回っていた。

だが、一向に現れる様子もなかったために一度戦闘禁止エリアに身を寄せるつもりで、地図を手掛かりに探し出した。

すると、戦闘禁止エリアは思いの外近くにあり、すぐに中に入る。

「体がもたないな……」

ベッドルームにあるベッドに寝転ぶ。

すぐに睡魔に襲われ、目をつぶると自然とまぶたが落ちた。

—
—
—
—
—
—
—
—

ゲーム開始から53時間36分

Λは、3階に上がり詮索を始めた。

「対象……13分の5を殲滅……残り7人」

Λは戦闘禁止エリアには、目もくれずに探し歩く。

「探索……続行」

Λの声は、3階の廊下響いた

—
—
—
—
—
—
—
—

五人目（後書き）

次話お楽しみに

最終戦へ（前書き）

どうぞ

案外後二話くらいで終わるかも

最終戦へ

ラグナ達は、3階に到達した。
この建物の、最上階にあたる場所。

「ここがてっぺんか」

ラグナは、辺りに気を配りながら前に出る。

「うん……気をつけてね、ラグナ君」

「たりめえだ」

ラグナは片手を剣の塚に置き、いつでも抜けるように身構える。

「マコト、今開始何時間だ？」

「もうすぐ54時間」

「わかった」

ラグナの頭のなかでは、後10時間ちよつとでルールから解放されると考えていた。

「ラグナ君、どうしたの？」

マコトが、妙ににやけているラグナに声をかける。

「いや、後少しだなんてな」

「そうだな……このままいけばお前とレイチェルは大丈夫だが、お前は……」

ティガーが、言葉に詰まる。

マコトの事を考えてだった。

だが、当の本人はあまり気にした風もなく、むしろ笑っていた。

「2人を護りきるなんてほぼ無理だったからさ」別に気にしてないよ」

「マコト……」

ラグナはマコトの名前を呼ぶが、次に言う言葉が見つからず、言葉に詰まる。

だがそれはラグナだけではなく、ティガーやレイチェルでさえも何も言えなかった。

マコトの一言が、嘘だとわかったから。

何か声をかけてやろうと口を開くが、口下手なラグナ達には、いい言葉なんか出てくる訳もない。

「とりあえず、休憩するか」

ラグナ達は、戦闘禁止エリアに向かうことにした。

――――

「ん、今何時だ……開始から54時間、そんなに時間はたっていないみたいだな」

ジンは、ベッドから起き出すと、足早に戦闘禁止エリアを後にした。

――――

「目標……反応なし」

Λは、今だに対象を見つけることが出来ずにいた。

Λの対象は、残り7人。

そのすべてが、3階にいる。

「探索・続行」

――――

ラグナ達は、ジンが戦闘禁止エリアを出てから10分後、迷ったあげくにやっとなつた。

「休憩しねえと体がもたねえな」

ラグナは椅子に座り込むと、机にうなだれる。

「それはそうだな……後20時間をきったしな」

「もうかれこれ1日分くらいは歩きっぱなしだしねえ」

マコトも、椅子に座る。

テイガーは、適当な所に座り込む。

流石に椅子が壊れるかと思ったのだろう。

「だけど、生存者は後何人なのかしらね」

レイチェルは思い出しながら、指折り数える。

「ここにいる4人、Λ、ノエル、と確認してないがジンとカルルの8人じゃないか？」

「このままいけば間違いなく赤鬼さんはアウトね」

レイチェルの言葉に、ラグナ達が目を向ける。

「考えてみなさい。私とラグナが生きした場合、ジンとノエルは死ぬ。もちろんΛも死ぬわね。それからマコトは既に失敗しているから抜けるわね……よって生存者3人、もし私達が殺された場合も同じく3人よ」

「なるほど……なら私は貴様達を身を捨ててでも護ってやらねばな」

テイガーは、手を握ったり開いたりを繰り返す。

「とりあえずはもう少し休憩してからにしようや」

「あなたらしいわね」

「疲れてんだよ……寝るから邪魔すんじゃねえぞ」

「わかってるわ、おやすみなさい、ラグナ」

「あたしも少し寝るねえ」

マコトもラグナと同じ様に、机に突っ伏して眠りだす。

「仕方ないわね、赤鬼さん、見張りを頼めるかしら？」

「もちろんだ、レイチェルⅡアルカード、お前も休むのか？」

「ええ……少しね」

――――――

開始から63時間24分

眠っていたラグナ達は起き出すと、すぐに戦闘禁止エリアを出た。
3階は案外簡単な作りで、入り組んだ通路はない。
それが、吉と出るか凶と出るかはわからない。

「赤鬼！ この先で1番戦い易いところは？」

戦闘に行くラグナが、地図を開いてついて来るテイガーに問い掛ける。

「このまま真っすぐ行った広場だ！」

そう言った時には視界は開け、大きな部屋に出ていた。

「ここか」

ラグナは、入ってすぐの場所で足を止めた。

「いるんだろ？ ジン！」

ラグナが叫んだ時、どこからか舌打ちが聞こえたかと思うと、氷の剣がラグナ目掛けて飛んで来ていた。

「うざってえ！」

ラグナは剣を抜き、一度振ると氷の剣とぶつかり、打ち砕く。

「ごすいまねしねえで出てきやがれ」

その言葉に、横の通路から姿を現す。

「探したんだよ、兄さん」

ジンはユキアネサを片手に、ラグナに近づく。

「準備はいいんだな？」

「どれだけ待ったと思ってるの？」

そう言ったと同時に、二人は走り出す。

二人の剣が交わりあい、すさまじい音をたてる。
幾度となく、互いの技をぶつけあう。

「ジン、テメエはここで死ね！」

「いやだよ、兄さんを殺して僕が生きるんだ！」

更に攻撃を続けあう。

「うらああああああ」

「兄さああああん」

二人は、ほぼ零距离で切り合っていた。

だがそんな中に、最も来てほしくなかった人物が現れた。

「目標……捕捉・殲滅……開始」

Λは、その広場の先の通路から攻撃を開始しだした。

Λの能力、空間を振曲げ、剣を自在な場所に移動させること。その剣がジンやラグナ達を襲う。

「ちっ、ジン、休戦といかねえかあ」

「仕方ないね」

ラグナとジンは頷きあうと、Λに向け走り出した。

最終戦へ（後書き）

次話お楽しみに

Λ (前書き)

どうぞ

Λ

「Λ あー!!」

ラグナの一振りは、Λが身を引いたことにより避けられる。
だがその先にはジンが待ち受けており、絶妙なコンビネーションでΛと戦っていく。

「兄さん!」

ジンの一振りはΛに命中し、再びΛの身をラグナの方へと押しやる。

「ナイスだ! ジン」

ラグナは倒れかかってきた身に斬撃を浴びせると、更に前に踏み出し、2度、3度と切り付けていく。

「兄さん!」

ジンはΛに飛び掛かりながら叫ぶ。

「おう、ジン! パス」

ラグナはΛの体を、思い切り打ち上げてやる。
そのΛに斬撃を浴びせ、最後に打ち落とす。

ジンは氷の剣に乗り、ラグナの隣に着地する。

「やるじゃねえか」

「兄さんこそ」

2人が見合っていると、Λがゆっくり立ち上がった。

「損傷・中破……連続稼動可能時間・2H」

Λは自身の確認を取ると、ラグナ達に向き直った。
そして、Λの体がぶれる。

刹那、ジンは何かに吹き飛ばされる。

その何かとは、高速で突っ込んできたΛだった。

ラグナは剣を手にとると、Λ目掛けて振り回す。

Λはその中を、見事な回避で避けていく。

「このままじゃじり貧かよ」

ラグナは一步下がると、間合いを取る。

Λはラグナを、しっかりと見つめていた。

だから逆から飛び掛かろうとしているジンには、気づいていないはずだった。

「対象・接近」

Λは身を翻すと、ジンに向き直った。

ジンは構わずに、Λに向け突っ込んだ。

「ジン!!」

ジンの剣は、Λに触れることはなかった。
だがジンの体からは、夥しい量の血が流れ出す。
Λの8本の剣が、ジンの体を貫くいていた。

「対象……致死量損傷」

Λは剣をジンから引き抜くと、ジンをまっすぐに投げ捨てる。

「ソードサマナー……アイン」

Λの指差す先にラグナの剣くらいのサイズのモノが現れ、ジンに
向け飛び出す。

その剣はジンの体に深々と突き刺さる。

その真後ろから2本目の剣が突き刺さる。

「ジン！」

「ツヴァイ……」

ラグナの叫びと同時に、3本目の剣がジンの身に降り注ぐ。
それもまた深く突き刺さる。

「ドライ」

「やめろ！ Λ」

ラグナが止めた時には、既にジンは死にかけだった。
そのままジンの体は倒れ、地に倒れた。

「ジン……」

「目標・行動停止……殲滅完了」

Λはラグナの方に向き直る。

「Λ、テメエ！」

ラグナは剣を振りかざし、Λに突っ込む。

幾度と剣を振るが、全てΛの剣が受け流す。

「目標・応戦開始」

Λは言うや、行動を再開する。

Λは軽く身を引くと、ラグナに向け剣を放ち出す。

「くそっ！」

ラグナが、どんどんと詰められていく。

その横を大きな尻尾を持った少女が走り抜ける。

マコトだった。

「ぬおりやああ！」

マコトは飛び上がると、Λ目掛けてその拳を振り下ろす。

「回避」

Λは一瞬身を引き、やり過ぎす。

「アステロイドビジョン！」

マコトが叫び、一瞬身を屈めたかと思うと、3方向に分裂し、Λに向け走り出す。

「コンビネーション！」

本物のマコトは、1番Λの懐に近い奴だった。

そのマコトはΛの鳩尾に一発食らわすと、身を屈め4回転し、水平蹴りを打ち込む。

そしてとどめのアッパー。

マコトはうちあげた腕を引くと、構えなおす。

だが、Λの声や動く音は一向に聞こえて来ず、マコトは構えを解く。

「マコト!!」

ラグナの声が響き、マコトが下を向いた。

すると、マコトの足元には、赤黒い穴の様なものが渦巻いていた。

「なにこれ？」

「逃げろ！ マコト」

「まずい、ラグナ||ザ||ブラッドエッジ、行くぞ」

ティガーが、先に走り出す。

だがΛの行動は予想外に早く、既にマコトの後ろに転移していた。

「マコト！」

ラグナが叫ぶが、マコトにはどうすることも出来ない。

「ムラクモユニット開放……次元干涉虚数法陣展開」

Λは手を開く。

するとマコトの頭上に、タオカカの時と同じ剣が出現する。

ラグナとティガーとレイチェルは走り、マコトを助け出そうとするが間に合いそうもなかった。

「その器白銀の刃にして蒼の根源、八岐の尾より出で世界を否定し
粛清する者よ。薙ぎ払え」

Λの声の区切りで剣が落とされる。

「ぬああああああ」

その剣はマコトの体には届かず、ティガーの腕によって支えられた。

「ラグナⅡザⅡブラッドエッジ、今のうちだ」

「すまねえ、赤鬼」

ラグナはティガーの懷をくぐり抜けると、マコトを渦から引きずり出す。

「ぐおおおおお！」

テイガーは、自分の体以上もある剣を支え続けている。

「赤鬼！」

「ラグナⅡザⅡブラッドエッジ！ 生き残れ！」

その言葉を最後に、テイガーが地に膝をつく。
そして、巨大な剣をその身に受ける。

「赤鬼！」

「テイガーさん！」

「目標……停止確認・殲滅続行」

Λは、再びラグナ達を視界に捕らえる。

「ちっ、うさぎ！」

「何かしら？」

レイチェルは、自分が呼ばれた事に驚く。

「今まともに動けんのはダメエしかいねえんだよ！」

「まったく……仕方ないわね」

レイチェルは傘を手にとると、立ち上がった。

「うさぎ」

だがそれより早く、マコトは脇目も振らずに走り出していた。

「おい、マコト！」

ラグナの声も聞かずに、走り出す。

「よくも、よくもテイガーさんをおお」

マコトの目からは涙がこぼれ、声にはやたらに覇気が籠っていた。だがそんなマコトの動きは、Λにとってはおあそび程度のもの、軽くあしらうとマコトを捕獲した。

「ムラクモユニット開放……次元干涉虚数法陣展開」

Λが、またフィールドを展開しだす。

「まずい……うさぎ！」

「私にも無理はあるわ」

レイチエルもラグナも、走りが早い訳ではない。もちろん遅い訳でもないが、マコトまでの距離を考えると、確実に不可能な距離だった。

「マコ……ト?!」

ラグナが、素っ頓狂な声をあげる。それもそのはず。

たった今倒れたはずのティガーが、両手を開き、Λの後ろに立っていたからだ。

「制御リミッター解放」

ティガーは、思い切りΛを掴む。
そのΛの体を、自身の身の上に掲げるように持ち上げる。

「うおおおおお!!」

ティガーは既に体中、傷だらけで、所々スパークを起こしたりもしている。

「うおらああああ」

ティガーは最後の力を振り絞り、天空に向けて飛び立つ。

「ココノエ……すまない。私は、お前の約束を破ってしまう事になるな……だが、私はお前といれた時間、楽しかった。ありがとう……ココノエ。」

ティガーはΛを手にしたまま、天井を突き破った。
その瞬間、2人の首輪が警報をならす。

「ココノエ、もう一つ謝っておく……せっかく改修した十一素体を、この手で壊してしまうとな……すまなかった」

ティガーは、朝日の登る空を見つめながら呟いた。

「ありがとう……それから」

ティガーは空中で姿勢を、△を下に向けて逆さに向く様に変えた。

「さよならだ！ キング・オブ……」

直後、ティガーの体の先から炎を纏いだす。

——————————

「赤鬼……?! マコト、うさぎ、逃げるぞ！」

ラグナは、先に走り出す。

ティガーが落ちてくるのだ、それ相応の被害は覚悟しなければならぬ。

3人は走り、壁を挟んだ廊下に身を寄せた。

——————————

「ティガー！」

叫び声と共に、高速で落下していく。

もちろん、自分もただではすまないこともわかっている。

そして数秒間の後、2人は飛び立った穴から急降下し、3階の床を突き破り、1階まで落ち、すさまじい轟音をたてた。

——————————

ラグナ達は、ティガー達が落ちて行った穴を呆然と見つめていた。

「赤鬼……」

そんな時だった。

遠くから銃声が聞こえ、間近で悲鳴が聞こえた。

ラグナが振り向いた時には、レイチェルは膝をつき、胸に手をあてていた。

「おい、うさぎ！」

レイチェルは見事に心臓を打ち抜かれたのか、一発で絶命していた。

「やった……やった。レイチェルⅡアルカードを殺した。」

ラグナ達の先にいたのは、ベルヴェルクを構えたノエルだった。そのノエルは、すでにPDAを片手に立っていた。

「これで私は、助かるんだ」

そういつて、PDAを首輪に差し込む。

……あなたは解除に失敗しました。これより15秒後罰ゲームを開始します。

その場にいた、3人の表情が強張る。
条件失敗？

「えっ？　なんで？」

当の本人、ノエルが1番わからないのだろう。
実際に、ノエルはレイチェルを殺した。

それが、ダイヤの2の条件のはず。
そう考えている間にノエルの周りの壁が開き、色々な機器が現れる。

「のえるん！」

マコトは、駆け出した。
そして、マコトがノエルの元にたどり着いた。

「のえるん、私だけ……置いていかないでよ……1人じゃ、寂しいじゃん」

マコトはノエルにしがみつく。
ノエルは、そのマコトの頭に手を置く。

「マコト……ごめん、マコト」

そして2人が目をつぶる。
それと同時に、周りの壁からいくつもの銃弾が駆け巡り、マコトとノエルを打ち抜いていく。

ラグナは見ていられず、顔を背けた。

――――

Λ（後書き）

次話お楽しみに

ラストバトル（前書き）

やっと書けました！

ちょっと、読者絡みの事でガチンコでイライラしちゃってたもので執筆が遅くなりました。

でもとりあえずは完結です。

衝撃のラスト？をどうぞ！

ラストバトル

時間にして数秒後、音が止む。

そしてラグナが崩れ落ち、床をたたき付ける。

「クソッ、クソッ、クソッ!!」

ラグナの目からは、とめどなく涙が溢れ出す。

「なんでだよ……なんで、皆、根はいいやつらばっかじゃねえかよ……クソォッ!」

そう言つて、地を打った時だった。

微かに笑い声が、聞こえた。

「ははは、姉さん……僕たちの勝ちだよ」

カルルは、笑いながらラグナを見つめていた。

「カルル……お前、生きてたのか」

「ラグナ!!ザ!!ブラッドエッジ、あなたはここで終わりです。いくらあなたでも、手負いで僕を倒すのは難しいでしょう?」

カルルの言っている事がわからず、ラグナは困った顔をする。

「どういふことだよ……」

「わかりませんか……僕がこのゲームの仕掛人です」

「んだと……なんのために！」

「蒼の魔導書の為ですよ。僕は姉さんを助ける為なら何でもしますよ。それにこれはゲームです。どこかで賭けをしている方達もいて、賞金もありますし……これで姉さんを元に戻せるんですよ」

ラグナはそう言ったカルルに対して、これほどないくらいに腹がたった。

そしてゆっくりと立ち上がると、カルルを指差した。

「カルル、テメエだけはゼツテゆるさねえ！」

「やだなあ、ラグナさん……そんなボロボロで言われても、説得力ありませんよ」

カルルのいうとおり、ラグナの体はズタズタだった。

「こんくらいなんてこたあねえ！」

ラグナは、ぐっと力強く立ち、剣を構える。

「ははは、姉さん、もうすぐ蒼の魔導書が手に入るよ」

カルルが先に走り出す。

ラグナは少し遅れ気味だが、カルルに真っ向から挑む。

正直ラグナにとって、無傷でカルルとやり合うのはわけない。

だが、かなりの傷を負った今、はたしてカルルに勝てるのか……
そんないやな感覚がラグナに付き纏っていた。

「チィッ！」

ラグナはカルルの接近に対し、刃を向ける。
カルルはそれに対し、自身のマントの中に隠したブリキをあらわにする。

そして二人の武器が交差し、鋭い金属音を放つ。

「ラグナさん、僕らのために死んでくださいよ」

「黙れ！」

一際大きな音が響き、2人は離れる。

「おい、カルル！ テメエが仕掛人ったなあ」

「そうですよ、僕がこのゲームの仕掛人です」

「なら、一つ聞かせろ。ノエルはなんで失敗した！」

「ああ、先輩のPDAは元々僕のなんですよ。先輩が眠っている間に姉さんをお願いしました」

「ってことはテメエのPDAは」

「ええ、このPDAは僕のではないです。先輩のPDAです」

「そうか……テメエは隠れて奮えてるふりだけしてりゃよかったってことか」

「人聞きが悪いなあ〜これはゲームなんですよ〜誰かが誰かを出し抜くなんてよくある話じゃないですか」

カルルは、悪びれる様子もなく言い切る。
その時点で、ラグナの平常は切れた。

「第666拘束機関解放」

ラグナは右手を振りかざし、鉄甲の背についた蒼い半球の物体に力を込める。

「時限干渉虚数法陣展開」

その半球が、青白く光る。

「ブレイフルー蒼の魔導書、起動」

青い半球から、刻印の様なものが浮かび上がる。
そして青白い光が、ラグナを包む。

「蒼の魔導書、ですか……それは僕らがもらいますからね。ねえ、姉さん」

カルルは、後ろにそびえ立つ姉さんに話し掛ける。
姉さんと言っても、人形なので、アークエネミー「ニルヴァーナ」と称されている……だが、カルルの実姉・エイダの細胞が用いられているために姿は人形だが、本物の姉である。

「ごたごた言ってんじゃねえ！」

ラグナは、一気に走り出す。

ニルヴァーナは大きさ故、動きが鈍い。

カルル自身も、そこまで体術が優れている訳でもない。

「うおおらああああ！」

ラグナは一度飛び上がると、剣をカルル目掛けて突き出す。

「ベリアルエッジ！」

空気が切り裂かれる音とともに、カルル目掛けて一直線に飛び出す。

カルルは後ろに飛びずさり、左手を下に向け、右手でそれを抑える。

ラグナのベリアルエッジは、カルルがいた場所に突き刺さり、床を砕く。

「くそがあ」

ラグナは、カルルがいる方に顔を向ける。

するとカルルは、下に向けていた手を上に掲げていた。

「麗しのカンタータ」

ラグナとカルルの間に、金色に光る大きな歯車が出現する。

それはすごい勢いで回転を始め、ラグナに詰め寄って行く。

「姉さん！」

カルルの叫び声に、ラグナは後ろにそびえ立つ物に気づいた。

ラグナを歯車と挟む様にニルヴァーナが、ラグナを掴もうと手を伸ばしていた。

「捕まったらまずい！」

ラグナはニルヴァーナの脇を抜けようと屈む。

だがニルヴァーナも予測していたのだろう。

同じタイミングで屈み込むとラグナを真っ向から捕まえた。

そしてラグナの無防備な背中に歯車が激突する。

ラグナは苦痛に顔を歪ませる。

「姉さん、ゲネラルパウゼ！」

カルルの指示と同時に、歯車の攻撃が止む。

そしてラグナはニルヴァーナに解放され、ゆっくりと地面におちていく。

だが、ニルヴァーナはそれを許さなかった。

ニルヴァーナはおちゆくラグナの体の下に、自らの手を差し込み、一気に振り上げる。

所謂アッパー

だが、それもただのアッパーではない。

鉄の塊で腹を思い切り殴られた様な痛みがラグナを襲った。

ラグナは腹に叩き込まれた瞬間、口から血を吐き出した。

そして近づいていた地面が、一気に引きはがされ無重力に似た感覚を覚えさせられた。

そして、ラグナの背中は、とてつもなく堅いものに打ち付けられ、更に血を吐き出す。

「姉さん、もう壊れちゃったのかな？」

カルルが、ニルヴァーナの傍に寄るのが見える。
だがラグナにとってはどうでもよくなって来ていた。

「もういいよな……」

ラグナは諦めの言葉をつぶやく。

「第一、なんで俺がここまでやらなきゃなんねえんだ？」

色々な事が頭を過ぎる。

ゲームが始まる前の事や、始まってからの事

「俺はどうすりゃいいんだ？」

そんなくじけそうになった時だった

ラグナの頭の中を、自分が言った言葉が過ぎった。

……「お前の分も、背負ってやるよ……」

「そうじゃねえかよ……自分で言ったんじゃないか」

ラグナの体に力が入る。

「テメェらの分まで生きてやるって」

ラグナは近くに転がる剣を手にする。

「だったら……」

剣を支えに立ち上がる。

「寝てる暇なんかねえだろ！」

ラグナは剣を構えなおし、しっかりとカルルを見据える。

「もう、まけねえよ！　ゼツテエにな！」

「しつこいですね……いきますよ、姉さん」

ラグナは無意識に走り出す。

何がラグナを走らせたかはわからない。

だが、何かに突き動かされるように……

カルルの正面までたどり着くと、カルルの攻撃やニルヴァーナの攻撃をくぐり、自分が攻撃出来る隙を窺う。

そして、カルルとニルヴァーナの攻撃のタイミングが重なった。

「もうテメエらには負けねえよ！」

ラグナは、ニルヴァーナの胴体に回し蹴りを叩き込む。

ニルヴァーナの体は、もといいた位置から数メートル吹っ飛ばされた。

「姉さん！」

カルルが、ニルヴァーナの方に走り出そうとする。

「テメエの相手は、俺だろうが！」

ラグナはそんなカルルの肩を掴み、強引にこちらを向かせるとカ

ルルの顔面を思い切り殴り飛ばす。

「コイツはテルミの分だ！ んでコイツは！」

ラグナはよろけたカルルの鳩尾に拳を叩き込む。

「バングのおっさんと、女医さんの分……それから！」

一瞬、浮き上がったカルルの背中目掛けて拳を打ち下ろす。

「零師団の奴と、ジンの分！」

打ち下ろされ、下を向くカルルの胴体を、膝蹴りで打ち抜く。

「コイツは、タオとうさぎの分」

さらに両手をカルルの頭上で握り合うと、思い切り振り下ろす。

「これが赤鬼とΛの分だ！」

カルルの体は、床にたたき付けられる。

その跳ね上がるった体を掴み挙げると、更に鳩尾に一発叩き込む。

「これが、ノエルとマコトの分だ！」

ラグナは、手から力を抜く。

カルルの体は自身を持ち上げていた力がなくなり、地に足をつく。だが、相当な回数殴られ、気が気ではなかった。

「んでコイツが！」

ラグナは自身の傍らに突き立てておいた剣を手に取り、振り上げる。

「全員の分だあああ」

ラグナの剣はカルルの身を捕らえ、剣の形を変え、柄は伸び、鎌の形にかわる。

その鎌の刃は、黒い炎のような物が、鋭く揺らめく。

ラグナはそれを何度も何度も、カルルに振りかざし、振り抜いて行く。

皆の思いが、少しでもとどけばと、祈りながら……

「最後だ」

ラグナは鎌を自分の元に引き寄せると、自身の身に力を込める。

それは黒い竜巻となり、カルルの体を、撫でていく

そしてラグナは、一度引き付けた鎌を剣の状態に戻し、横風にカルルの腹目掛けて振り抜いた。

「これで全部だ……テメエにも皆の辛さがわかっただろう……」

ラグナは、身を翻す。

カルルは既に息絶えていた。

確認していないが、ニルヴァーナの様子を見れば見当がつく。

「終わったのか……」

ラグナは自身のPDAを見る。

時間は開始から71時間15分
もうすぐ終わる。

ラグナはPDAを首輪に差し込み、外す。
そして壁にもたれかかる。

「……なんか……やりきれねえな」

ラグナは一人、つぶやいた。

――――――

それからちよつとして、ラグナは無事に救出。
賞金も渡された。

だがラグナは、それを帰り際の森に捨てた。
それと同時に、土を盛り、木を12本立てる。

「こんくらいのことしか出来ねえが、すまないな」

ラグナはその前にしゃがみ込み、手を合わせ、目をつぶる。
数秒後、目を開け、立ち上がる。

「さて……と、行くか……」

ラグナはどこへとも知らず、歩き出した。
このゲームで命を落とした友人達の、気持ちを背負って……

ラストバトル（後書き）

はい

やとこさ書き終わりましたあ

毎日更新とか言って四日ほど空いちゃった事にはあやまりますね m

〔 m

後、シークレットゲームでの数々のルール違反についてはすいません、それについて指摘していただいた方ありがとうございます

「本音言うと、読み専のマナーの悪さが本当にやばい。

すっげ自己中に思えましたね。

書きもしねえ奴らがでしゃばんじゃねえとか

書いて苦勞味わってから辛口コメント書けての」

※「」部分は、わざわざ感想に返信したが、ユーザーでないために読んでないであろう方のために書かせていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4872t/>

BLAZBLUE IN THE SECRETGAME

2011年6月10日10時55分発行